

くまもとアートポリスシンポジウム報告書

都市にデザインを、田園にアイデアを

熊本県

1990年6月27日 八代市厚生会館にて開催



くまもとアートポリスシンポジウム

テーマ 都市にデザインを、田園にアイデアを

日時 1990年6月27日(木)13:30▶17:00

会場 八代市厚生会館

参加者：約900名

主催：熊本県

後援：建設省、八代市、熊本県市長会、熊本県町村会、日本建築学会九州支部熊本支所、熊本まちづくり協議会、(社)熊本県建築士事務所協会、(社)熊本県建築士会、(社)熊本県建設業協会、(社)熊本県宅地建物取引業協会、八代経済同友会、八代建築設計事務所協会、八代建築設計監理協会、八代建設業協同組合、八代建築技能士協同組合、(社)熊本県建築士会八代支部、熊本日日新聞社、NHK熊本放送局、熊本放送、テレビ熊本、熊本県民テレビ、熊本朝日放送、エフエム中九州

くまもとアートポリスシンポジウムプログラム

主催者挨拶 杉浦健次 熊本県土木部長

来賓挨拶 鈴木俊夫 建設省住宅局建築指導課長
沖田嘉典 八代市長

特別講演

テーマ 環境をつくる建築

講演者 伊東豊雄 建築家

パネル・ディスカッション

テーマ 街の創造と再生 くまもとアートポリスとまちづくり

コーディネーター

八束はじめ



やつかはじめ／くまもとアートポリスコミッショナー事務局ディレクター・建築家／1948山形生まれ／1972東京大学都市工学科卒業／1978磯崎新アトリエ入所／1984UPM八束はじめ建築計画室設立現在に至る ○建築家として活動の他評論・思想の著書多数

パネリスト

桂 英昭



かつらひであき／1952北九州市生まれ／1979熊本大学建築学科大学院修士課程修了／1980年米國フロリダ大学大学院修了／1980～81熊本大学工学部助手／1982国立八代工業高等専門学校土木建築工学科助手／1988同助教授現在に至る ●主な建築作品「木魂館」

越沢 明



こしざわあきら／1952東京生まれ／1976東京大学工学部都市工学科卒業／1982同大学院博士課程修了／1982神奈川県庁都市部政策部／現在同都市部都市計画課／東京工業大学・日本大学非常勤講師 ●計画デザイン思想史を専攻

鶴山 崇



つるやまたかし／1935八代生まれ／1958中央大学工学部土木工学科卒業／1958八代市役所入所／現在同建設部都市計画課長(兼市街地開発推進室長)

オブザーバー

伊東 豊雄



いとうとよお／建築家／1941ソウル生まれ／1965東京大学工学部建築学科卒業／1965～71菊竹清訓建築事務所勤務／1971アーバンロボット設立／1979伊東豊雄建築設計事務所名称を変更現在に至る ○1984日本建築家協会新人賞／1986日本建築学会賞受賞 ●主な建築作品に「中野本町の家」「ホテルD」「笠間の家」「シルバーハット」「レストランノマド」「横浜風の塔」などがある

同時開催 A R T P O L I S T O U R

八代市博物館現地視察

会場 八代市博物館建設地

くまもとアートポリス参加プロジェクト展示

時間 12:00▶17:00

会場 八代市厚生会館大ホール ホワイエ

くまもとアートポリスシンポジウム

司 会

皆様、本日はようこそお越し下さいました。ただいまから熊本県主催によります「くまもとアートポリスシンポジウム」を開催いたします。

第3回にあたるアートポリスのシンポジウム、八代で開催することになりました。この開催に当たりまして、まず熊本県土木部長杉浦健次が皆様方に一言、ご挨拶を申し上げます。

主催者挨拶 杉浦 健次 熊本県 土木部長

ご紹介頂きました土木部長の杉浦でございます。本日は本当に大勢の方にお集まり頂きまして本当にありがとうございます。主催いたしましたものを代表して、一言ご挨拶申し上げます。

「くまもとアートポリスシンポジウム」につきましては、大変大勢の方がこのようにお集まりいただき、ありがたく考えております。また本日は建設省市街地建築課の高度利用調整官の熊様をはじめ、講師の先生方、大変お忙しい中にも関わりませず、ご来席を頂いたことを心からお礼を申し上げます。

さて、本県におきましては昭和63年度から「くまもとアートポリス」構想を推進して参りました。これは今後建設される建築物や橋等の設計にあたりまして、その設計を国の内外を問わず、あるいは国際的に、あるいは新進気鋭の建築家やデザイナーの方々にご依頼をしまして、後世に残し得る質の高い文化的資産を創造し、環境の向上を図っていかうと、こういう構想で始めて参りました。これまでに、今お話にもありましたように熊本北警察署、あるいは熊本市の新地団地等の34件のプロジェクトを進めておりますが、既に海のピラミッドという愛称で呼ばれております三角港フェリーターミナル、あるいは県境にあります加久藤トンネル換気所、あるいは熊本市の花畑公園と江津湖のトイレと、こんな4件が既に完成をいたしております。そしてここの八代市におきましても本構想にご賛同頂きまして、本日、特別講演をお願いいたしております伊東豊雄先生の設計になります博物館を建設中でございます。伊東先生の特別講演の中でお話があるかと思いますが、完成の後にはきっと周辺の環境と調和しながら、八代の未来を語るものとなっていくであろうと期待をしているところでございます。

このようにして県内各地でプロジェクトができていく中で、2年後の平成4年にはこ

これらの建築物と、それから既にできております優れた物、あるいは県民の方々に親しまれてる建築物等を紹介する見学コースを設定いたしまして、県内全域にわたる建築物を対象としました「第1回国際建築展くまもとアートポリス92」というのを開催する予定としております。本日のシンポジウムは全国的にもそのユニークさで注目されております「くまもとアートポリス」構想を更に多くの地元の方々に、広くご理解を頂きたいということで企画したものでございます。

シンポジウムでは町の創造と再生をテーマに、パネルディスカッションもございます。ちょうど今月は建設省の主催によりまちづくり月間でもあり、その推進に少しでもお役に立てばなりよりのことと考えております。このまちづくりにつきましては、本県におきましても、今の「くまもとアートポリス」構想をはじめとして熊本県景観条例、あるいは緑の3倍増計画等、全国に先駆けた文化性豊かな新しいまちづくりを推進しているところでございます。お集まりの皆さん方におかれましても、どうぞ今後一層のご支援ご協力を賜りますようお願いをいたします。

最後に本日のシンポジウムが実り多いことをお祈りいたしまして、主催者を代表してのご挨拶とさせていただきます。どうも本日はありがとうございました。

司 会

続きまして、ご後援頂いております建設省から住宅局市街地建築課高度利用調整官でおいでになります熊建夫様にご挨拶をお願いいたします。

ご挨拶

熊 建夫 （建設省住宅局市街地建築課高度利用調整官）

ご紹介頂きました建設省の高度利用調整官の熊でございます。本日は「くまもとアートポリスシンポジウム」開催にあたりまして、一言お祝いのご挨拶を申し述べたいと思います。

熊本と申しますと、私どもは大変風光明媚なところだとこのように思うわけでございます。申すまでもなく東に阿蘇山、西に天草があるわけでございまして、私も度々と言いますか、何回か熊本にお邪魔することはあったわけでございますが、天草のあのパールラインを越えて行きまして、途中から有明海をずっと眺める、あの自然の美しさ。ボーッと見ておるあの気持ち良さというのは、大変何物にも変えられないというふうに思っておりまして、こちらに来る度にそちらに寄せて頂いておるということでございます。

そのような熊本県におきまして、今度はアートポリスということで、これはアーティフィシャルということもあるんですが、人工的に素晴らしい都市を築くんだと、そ

ういうことをなされるということで、大変興味深々であると共に大変関心を持っており
ということでございます。私は高度利用調整官ということで、何をやっておるかと言いま
すと、市街地の高度利用を行うということでございまして、具体的に申し上げますと、
再開発等を通じてまちづくりに携わっていると、こういうことでございます。再開発と
言いますとこれまでは駅前ですとか、あるいは本当の中心商店街におきまして再開発を
する。大規模な建物を造って、共同化して、そしてそこに大きなテナントを呼んで来て
建てるということでございました。近年ではこれがかなり大きな規模のものができてき
ておるわけでございまして、大変大規模なもの、しかも多様な機能を持ったものが多い
わけでございます。皆様、あるいはお聞き及びになったことがあるかもしれませんが、
代表的な最近の例で言いますと、東京の赤坂六本木にありますアークヒルズというのが
ございます。これは敷地面積でいきますと6ヘクタールもあるという大規模なものでご
ざいました。その中にホテルがありますし、事務所がありますし、サントリーホール
のようなものもございますし、また住宅もあるというふうなものでございますが、そう
いう多機能、それから併せてアトリウムと言いますか、そういう空間があるわけござい
ますし、またデッキがあるということで、これは巨大技術というものが進んできた故に
できてきたものであろうと、そういったもので美しさを出してきておると思うわけでご
ざいます。

また再開発に関連いたしまして昨今、皆様方もテレビや新聞等でご承知かと思いま
すが、日米構造協議というもののの中で大規模小売店舗法の改正云々ということ、こうい
うことが言われておりました。それが既存の商店街をどのように活性化して行くのかとい
うことになってきておるわけでございまして、大店法を緩和するということによりまし
て、直ちにそういう既存商店街を如何に活性化して行かなければならないのかというこ
とが大きなテーマになってきておるわけでございます。これは従来型の再開発と多少違
って来ておるわけでございます。

従来の再開発は幾つかの敷地を共同化して1つの敷地にして大きなものを建てよう
ということであったわけでございますが、既存の商店街の活性化と言いますのはそうい
うことではなくて、個々の建物、それを共同化ではなくて、協調的に建て替えて行こう
ということが段々と主流になって来るのではないかと、こう思うわけでございます。そし
て統一された景観ですとか、あるいはセットバックなんぞをですね、皆さんが協力し合
って行って、そして美しい街を作っていくということであらうということを感じておる

わけでございます。私どもの多少宣伝になりますけれども、そういう協調して皆様方、商店街の方のみならず、既存の住宅地でも結構な訳でございますけれども、地権者の方々が協議し合ってですね、協議会を作っているいろいろ研究しようといった時、私どもの言葉でまちなみデザイン推進事業と言っております。そういった事業も本年度からスタートしたということでございまして、そういった意味で言いますと協調化して、周辺と調和したそういうまちなみを作って行こうということに1歩道が開かれたということでございます。

あと20世紀は10年ということでございますが、現在、大変経済情勢というのは好調でございます。私、何処へ行っても話しておるわけでございますが、こういう順調な経済情勢というのはあと10年間持つかもしれないけれども、いつまでも続くものではない。こう思っておるわけございまして、皆様方もそういうお考えはあろうと思えます。そして将来にわたって、そういう経済情勢というものがあがる程度落ちて来た時にどうするかということでございます。その以前に社会資本の整備を進めておかなければならないということでございまして、今の段階にいろんな意味での投資をしなければならぬと、こういうふうに思っておるわけでございます。

現在は都市間の競争ということが言われておるわけでございます。この「くまもとアートポリス」でいろんな所でいろんな建築が造られるということでございます。そういうことを大いにやって頂いて、そして都市間の魅力を、都市相互の魅力をそれぞれ競い合って頂いて、熊本県全体が素晴らしい県土になるということを期待しておるわけございまして、更にそれらが波及いたしまして、全国的にも活性化された、そして美しいまちづくりがされるということを心から祈念しておるわけでございます。

本日のシンポジウムが成功裏に終わることをお祈りいたしまして、簡単ではございますがご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

司 会

それでは続きまして、このシンポジウムの開催に大変ご尽力を下さいました、地元八代の市長、沖田嘉典様からご挨拶を頂戴いたします。

ご挨拶

沖田嘉典 （八代市市長）

皆様、こんにちは。ただいまご紹介頂きました地元の沖田市長が、たまたま今朝から上京をいたしまして、全国市長会に出席をいたしました。私、市長に代わりまして出席をさせて頂きましたので、お許しを頂いて、一言ご挨拶に代えたいと思います。

本日は地元八代市で、「くまもとアートポリスシンポジウム」を開催して頂き、心か

ら厚く御礼を申し上げる次第でございます。かねてから本市発展のため、ご尽力を賜っております国、県関係機関をはじめ、ご出席を頂きました多くの皆さん方に、衷心より御礼を申し上げる次第でございます。

さて、八代市は熊本県がすすめておられますところの、「くまもとアートポリス」に昭和63年7月県下の市町村では最初に参加を決定いたしましたわけでございます。その後、国内はもとより海外でもご活躍中の建築家、伊東先生を県からご紹介して頂きまして、博物館の設計をお願いいたしましたところでございます。基本設計、実施設計の後、昨年の11月に工事に着手いたしまして、来年3月の竣工に向けまして、現在、工事が順調に進んでおるところでございます。この博物館は新しい八代の文化の殿堂として、また将来に残し伝える文化遺産といたしまして、永く市民に親しまれるものとなるでございましょう。期待をいたしておるところでございます。

本日のシンポジウムでは「都市にデザインを、田園にアイデアを」と、そういうテーマでございますが、建築の文化性に対する認識を深めますと共に、本市まちづくりの参考といたしたいと、このように存ずるわけでございます。ご出席の先生方にはご専門のお立場から貴重なご意見、活発なご討論をお願い頂きたいと思う次第でございます。

最後に今後ますます「くまもとアートポリス」が発展いたしますように、心から祈念申し上げまして、挨拶に代えたいと思います。お世話になりました。よろしく願いたします。

司 会

ありがとうございます。八代市長でおいでになります沖田様のご名代としてご挨拶を頂戴いたしました。

続いて皆様お待たせいたしました。建築家伊東豊雄様によります特別講演を始めさせて頂きたいと思います。

伊東様は日本建築学会賞をはじめとして大変多くの賞を受賞になり、またフランクフルト市オペラ劇場照明デザインコンペに当選なさるなど、国内はもとより海外でも広くご活躍中でいらっしゃいます。今回「くまもとアートポリス」参加プロジェクトの1つでございます八代市博物館の設計を担当しておいでです。

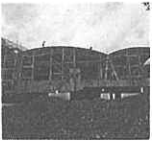
それでは皆様、お待たせいたしました。伊東様にご登場をお願いいたします。

ご講演

伊東 豊雄 （建築家）

皆さん、こんにちは。今日はこういうレクチャーの機会を与えて頂いて、本当ありがとうございます。私、今日は最近、私が造って参りましたプロジェクト、特にここでや

らせて頂いております八代市立の博物館を含みまして、スライドを映させて頂きながら、私が最近考えております建築についてお話をさせて頂こうと思っております。



実は先ほど来、ご紹介がありましたように、ちょうど2年前にアートポリスの企画の中で、市立の博物館の設計をさせて頂くことになりまして、それから2年ばかりこの町に何度か足を運ばせて頂いておりますけれど、その間、県、及び市の方々のご尽力によりまして、本当に楽しく設計をさせて頂いております。それからまた昨年の11月から施工に入りまして、またこの造って下さる方々が本当に一生懸命、ちょっと大袈裟な言い方をすれば、命を張ってというぐらいに頑張ってお造り下さっておりまして、後で見えますけれども、コンクリートの工事が大体終わりました、現在、その上にかかります鉄骨の屋根の製作に入っております、今年の8月末ぐらいにはほぼその形が、全貌が現れることになっております。大体、今年一杯で建築本体はほぼできあがるという当初の予定どおりに進んでおるわけですが、この建築の設計を始めました時に、市の方々からもそうですし、あるいは細川知事からもご要望があったということで、皆さん、私より良くてご存知だと思うんですが、この博物館の敷地は目の前に松濱軒という大変美しい建物がございます。これは松井家第3代の城主が母上のために造られたという松井家の別邸でございまして、お茶室を中心とした和風の非常に伝統的な建物なんですけれども、その建物が目の前にございまして、それからお城もすぐ近くにある。このような環境の中で周囲の環境と調和した建物を造って下さいということ、そのことだけを言われたような気がいたします。設計をいざ始めてみますと、この敷地も公園の中なんですけれども、建蔽率が制限を受けておりまして、かなりなボリュームになってしまっているんですね。どう考えても3階ぐらいの建物になる。

まずここで私がどのように環境と調和させていったらいいだろうかと考えた時に、まず第1に思いつきましたのは、とにかくこの3階建てのボリュームをスケールダウンして、どうやって松濱軒のスケールに合わせていくことができるだろうかとということでありました。それで後にご紹介いたしますが、松濱軒から道路を挟みまして、できるだけ後ろへ後ろへと高さを持ち送りすること、まあセットバックしていくような形をとりまして、何とかヒューマンなスケールに落としたいということをまず第1に思いました。それから2番目に、これはもともと公園の敷地なので、公園の中にもう1回新しい公園を造りたい。博物館を機能的に立派なものにすることはもちろん言うまでもないことなんですけれども、建築自体もその公園というランドスケープの中に溶け

込ませてしまいたい。博物館を利用をされる以外の方々にも、いつもこの建物を含んで、この新しくできあがった公園を楽しんで頂きたい。そんな建築ができないだろうか。

実は、この設計に取りかかる前に「環境」という問題と、もう1つはこれは教育長からの言葉だったんですけれども、ここをおとずれた若い人がお見合いできるような博物館を造って下さいと言われてました。これは今、申し上げましたように、博物館を別に利用されなくても、ここに来てお茶を飲んだり、デートができるような場所にならないだろうか。その為には何とか若い人たちが、ここへ来れば何かファッショナブルな雰囲気味わえるといったような場所にしたいということも思いました。

それから第3番目に、環境に、回りに調和するだけではなくて、環境に何か刺激を与えて、新しい環境を作って行かなくちゃならないんじゃないかと。正直申し上げて、いささかこの八代市というのは穏やかすぎると。何か昼寝をしているような、大変気持ちのいい場所ではあるけれども、もうちょっと何か刺激があってもいいんじゃないかという気が、正直なところ、私はいたしました。ですから、新しい建築を造るというよりは、新しい環境を造りたいということを強く思ったわけです。

そんなことを考える、ちょうど契機になった他のプロジェクトが1つございます。これは大変寒い北海道で、昨年完成した建物なんですが、これはあるビール会社のゲストハウスです。ビール会社の新しい大きな工場ができて、そこへ工場見学へやって来た人達が、その後そこでビールを飲んで食事をして、後、庭園を散策できるといったような企画の建物なんです。最初に敷地を見に行きました時に、ちょうど真冬の1番寒い時期で、敷地一面雪に真白に覆われておりまして、工場もまだできてなかったもんですから、全く広大な敷地で、敷地の境界がどこにあるかもわからない。極めて平坦な敷地で、私、それまで大体都市の中、特に東京を中心にして小さな建物ばかりを設計してきたもんですから、このような広大な敷地の中へ出て行った時に、一体何をしたらいいのかということがわからなくて、その敷地に佇んで茫然としたことを覚えております。しかも普段から私は「風の建築」といきがって言うておりましたが、その敷地へ行ってみると本当にビュービューと風が吹いておりまして、ここで果たして私が造ってきたような建築は成り立つだろうか。結果としてその建物は、もうこれは土の中に埋めてしまうしかない。半分は逃げで始まったんですけれども、そうしまして、その広い敷地の中にちょうど貝殻を埋め込んだような広場を人工的に造りまして、逆にそこで出た土を隣に盛り上げて、人工的に最初から起伏があったかのような地形を造ったわけです。その



中に半分建築が埋め込まれたような、半分は顔を出していて半分は地中にあるような建築を造ったわけです。

それはそんなきっかけで始まったんですけれども、そうやって土をいじり、ランドスケープを新しく、自然を多少変えていく。そうやりながら建築を造ってみると、大変いろいろな面白いことがある。それまでも都市の中ではいろんな相対的な条件の中で建築ができていくわけなんですけれども、自然の中でも結局同じことができるんだということに初めて気がついたわけです。

それはある種のアースワークとでも呼ぶような仕事と絡んでいると思うんですが、ここでもう1回、自分の建築の考え方を整理してみますと、昔から私は1つの川の流れの中に渦を造るように建築を造りたいと思ってきたわけです。ということは1本の川があって、その中にこう壁を立てて流れを堰き止めてしまうことではない。あるいは水が入らないような場所を造ることでもない。例えば川の中に1本、柱を立てますと、その柱によってその周辺に渦が発生します。あるいはその脇にもう1本、柱を立てますとまた渦が発生します。その渦と渦とか関係しあって、より複雑な流れ方がある。その渦というのが一体何だろうかと言いますと、これが人の集まる場所である。自然の中でも地形は常に流れている。水も流れている。空気も流れている。あるいは都市の中でも車も流れているし、人も流れている。あるいは音も流れている。

そういう様々な流れの中、流れの状態としてその自然ももっと人工的な環境も捉えることができるだろう。そうした流れの中に、ある渦を発展させる。そんな建築ができないものだろうか。ということはその流れを止めるのでもなく、しかしその流れに少し変化を与える。お互いに干渉し合うと言いますか、そんな最小限の行為を建築がすればいいのではないかというように、だんだん思うようになったわけです。

こんな例を引き合いに出すと1番おわかりになって頂けると思うんですが、例えば桜の木が1本あって、そこ花が咲くと人々がお花見にやって来る。その時にその桜の花の下に人々は赤い毛氈をひいて、それでそこに幔幕を囲ってそこで酒宴の席を作った。これが私は日本人の1番プリミティブな空間の建築の考え方だったんじゃないだろうかと。ここには自然と一体になった空間があるし、それからまたその幔幕を張って、その中で人々が集まりコミュニケーションをする。これは非常にテンポラリーな（一時的な）空間である。それからまた最初から何かそこに建築があるんじゃないくて、桜の花がそこにあるという1つの出来事があって、そこに人が集まって来て、それから初めて建築が

できる。非常に、しかもそこに張られる幔幕というのは軽快なスクリーンであります。言ってみれば大変相対的であり、かつ現象的な建築であると。

日本の伝統的な和風の建築と言われているものも、屋根はそれに屋根がついたようなものであって、障子ですとか襖というのはいつでも取り外せば幔幕のように取り払われてしまう。それからまた日本の和風の建築というのも、普段は何もないけれども、そこに人が集まるというイベントがあった時に、様々なものを建て込んで初めて立派な席ができる。そういった幔幕をもう1回、我々の今という時代に考え直してみると、一体どういうことになるんだというのが、私が最近考えている建築であります。今の都市というのは大変に変化が激しいわけですが、それはもちろん極めて土地といったような、地価といったような問題を抜きにしては語れないんですけれども、その背後にどこかで我々の非常にテンポラリーな空間の認識、すなわち「仮設的な空間」の認識の仕方が影響を及ぼしているに違いないだろう。

そういった我々には我々に相応しい意識に基づいた建築とか都市とかといったものの在り方があるんじゃないだろうか。そのことをもう1回考えてみたい。そのことは決して障子を使うとかですね、あるいは襖を使うといった形で伝統に回帰することではないだろう。常に現代の最先端のテクノロジーをふんだんに使って、その上で21世紀の新しい幔幕というのは一体何なのであろうかと。その新しさというものが絶対に不可欠であるというふうに私は思っています。そんなことを思いながら、これからスライドをご覧くださいと思います。それではスライドをお願いいたします。

今、ご覧頂いている絵が、先ほど申しましたように桜の花ではありませんけれども、これは川があって、そこで釣った魚をその側で食べている。これほど大変プリミティブでかつ豊かなレストランというものではないかと思うわけですね。

次のスライドをご覧のように桜の花の下でスクリーンを築いた。こちらはつたない絵ですが、それに代わるようなものは今の都市では情報である。何らかの形で情報が発せられると、その下に人々が集まってくる。その回りを最低限のもので囲ってやると1つの建築になるはずだということが、先ほど申し上げたことでございます。次をお願いします。

そんなコンセプトでつくりましたのが「日仏会館」という、パリに建ちます複合施設の、これはコンペティションの応募案なんです。これは見事に落選いたしました。今年の3月に審査があったんですけれども、割合いい線までは行ったんですけれども駄目だ



った。ただ私としては、今、申し上げたような建築の造り方、コンセプトがこのプロジェクトには一番端的に現れている。目の前にご覧いただけるのはこれはセーヌ川なんです。それで奥ぐ近くにエッフェル塔がありまして、「セーヌに浮かぶメディアシップ」というタイトルをつけたわけです。皆さん、環境に合わせると言いながら、こんなパリの都市の中で非常にハードな建築の間で、どうしてこんな建築なんだとお思いになるかもしれませんが、その件をまずご説明させていただきます。次のスライドをお願いします。

ここに3つ浮かんでおります船のような、宙に浮かんだ魚のような、この影にもう1つありますが、この3つをメディアシップと呼んだ。要するにここから情報が発信されると。1つは情報が発信される。1つはコンピュータコントロールのセンターになっております。その他は一応中にレストランとかVIPラウンジといった機能がありますが、そこから更にその下に向けて情報が発せられる。そうするとその下にその情報によって、この下に人々が集まって来て、ギャラリーになったり、オーディトリウムになったりする。劇場になったりする。あるいはシンポジウムを行われるようなセミナーホールになったりする。そういったものがこの中にちりばめられているわけですが、この波形をした波のようなスクリーン、これが幔幕である。更にその外側を敷地の外形に沿ってもう1つのスクリーンが覆っているというわけですね。はい、次のスライドをお願いします。

実際にプランはご覧のようになっておりまして、ここでもう1つ見て頂きたいのは、実はこのグリッドがその敷地に対して少し別の方向を向いているわけですね。ところがこのグリッドがパリの都市軸に合っているわけです。エッフェル塔周辺の都市の軸線の方に合っていると。ということは、この幔幕は先ほどからお話ししたように、ガラスでできた新しい幔幕ですけれども、これはテンポラリーなものであると。たまたま敷地の外形に沿ってこれは造られた。だけれどもこれがなくなった時に、これ越しに奥にパリの街に合ったソリッドな建物が見えて来るといったような仕掛けになっているわけです。はい、次のスライドをお願いします。

このグリッドが都市軸を意味します。それでここにお魚のようにメディアシップが浮かんでいて、その外を本当にテンポラリーな幔幕が囲っているというわけです。実はこのガラスを私どもの提案では、液晶の入ったガラスで造りたいと思ったわけです。ということは、電氣的にこれを透明と不透明の状態に変えることができる。ガラス1枚1枚のパネルは小さなものですから、それを別々にコントロールすれば、理論的には1つの

電光掲示板のようなスクリーンができるわけですね。ですから今、この絵では不透明な状態と透明な状態とが横のストライプになっておりまして、ちょうど水の中にこのメディアシップが浮かんでいるような状態を想定してつくっているわけです。

だんだん不透明な状態を多くしていくと、ご覧のようにちょうど建物の前に雲が出てきたとか、霧が発生したような状態になっていくわけですね。更に、これはコントロールの仕方によって、ちょうど壁と開口部のように、不透明な中に1部分だけ開口部を造るように透明な状態を発生させることができる。

そもそも最初の頃のスタディモデルではこんなものになった。メディアシップが1つ大きなものがありまして、その下に幔幕が張られている。そのメディアシップが、何であんなものが出てきたかと言いますと、その同じ頃、こんなモデルを造っておりました。これはある展覧会のために造ったプロジェクトでして、これはそのまた模型なんですけれども、「東京遊牧少女の顔」という宇宙船のような、かつ一方で布にくるまれたパオのような、大変プリミティブな住宅のモデルである。はい、次のスライドをお願いします。



実際にこれは、ベルギーのブリュッセルで昨年行われました、「ユーロパリア」という日本をテーマにした展覧会の中で展示されたわけですが、長さが7、8メートルあるような模型です。

私は、最近被膜ということに大変こだわっておりまして、人間の体をどのように包んで行けるか。まさしくそれは幔幕のように最初から表裏があるわけではなく、人間が集まった時に、そこをくると囲めば、あるいは覆えば、それが一番プリミティブでテンポラリーな建築になるだろう。そんな思いでいろんなスクリーンをつくらうとしているわけですね。

かつてのように建築というのは地にどっしりと根を生やしたようなものではなくて、むしろ軽やかで本当にスクリーンを1枚回しただけのような、あるいは場合によってはそれが風で浮かんでしまうぐらいの、大変軽やかな建築にしたいと考えています。

これは例えばエキスパンドメタルという菱形をした網をつかった椅子です。ただこうやって見ますと、非常にメタリックな素材、金属じゃないと言われるかもしれないんですけど、私がここで表現したいのは金属を強調したいのではなくて、かつての藤椅子に、藤を組んで椅子を造った、そのコンセプトをもう1回新しい素材、現代に1番ぴったりの素材で造るとどんなものになるだろうかと、人間の体をそうやって我々の感覚にフィットする素材で囲むとすれば、どんな素材になるだろうかということから、こ

んな椅子ができてきたわけです。

あるいは、これも本当に昔の藤椅子とほとんど同じようなものなのですが、下にパンチングメタルという穴の開いた、これはステンレスですか、ステンレスの板をおきまして、その上にエキスパンドメタルという菱形の網をおきまして、その間にスプリングをたくさん入れまして、ここに座ると宙に体が浮いたような、そんな感覚を味わって頂きたいと思ったわけです。ですから家具もそうですし、建築もそうなんですけれども、何か人間の体が重力を失ってパーッと宙に浮いてるような、そんな思いをいつも描いております。

それで、何でそんな透けるようなものかという、これが私は常に新しさを求めたいということは、別に何か流行を追っているわけでも何でもなくて、我々の時代には我々が町の中を歩いているといろんな、我々が気が付いてないけれども音であるとか、あるいは光であるとか、我々の体というのはそれを感じ取ってるんですね。体では感じていながら、それがまだ物に置き代わっていない。それをもっと素直に、音楽だったら我々の時代のフィーリングみたいなものがもっと手近に音になっているじゃないか。建築はそれに対して我々の時代のフィーリングというのをまだ形に表していないんじゃないか。それをもっと素直に表現すれば、何か我々の体にもっと心地好い建築ができるんじゃないかと思うわけですね。これなんかも例えば町を歩いていると、皆さんも良く経験されることだろうと思うんですが、ショーウィンドウの中にマヌカンが入っている。それから実際にその前を歩いている人、更にそこに自分なりの影が映っている。あるいは更に透けて向こうの町が映っている。何重にもいろんなものがオーバーラップしあって、どこまでが本物でどこまでが映像なのかわからないような、そんな世界に来ている。そんなフィーリングを新しい幔幕に表現したいと思っているわけです。はい、次のスライドをお願いします。

こんなパオが東京の町にいっぱい浮かんでいるというのが、私の勝手な住宅のイメージです。ですから一方ではテクノロジーを満載したような宇宙船である。それで他方では布で覆われた最もクリミティブなパオである。そのちょうど中間に今日の我々の建築があるような気がしているわけです。

このスライドはいわゆるまさしくストローハットといいますか、何か麦藁帽子のような家を造っている例です。それをひっくり返せば、本当に麦藁帽子を一回り大きくした小屋ができる。建築というのはもともと何か人間の体を覆う、非常にプリミティブなも

のである。こうやって考えていくと、人間の衣服も建築もそんなに別なものなんじゃないんだ。我々が建築を造る時にあまりにも外側から建築を考え過ぎてるんじゃないか。対象物として建築を考え過ぎてるんじゃないかということを思うわけです。

それでそんな思いを実際の住宅に置き換えてみましたのが、数年前に造りましたシルバーハットという住宅です。まったくそのコンセプトは今、お話ししましたように、麦藁ストローでできた小屋を現代のもうちょっとメタリックなものに置き換えたというわけです。



これは私自身が今、住んでいる住宅なんですけれども、ご覧のようにこれはイメージモデルで、ある意味では大変昔の日本の家に近いということは、壁が全部構造からフリーなんですね。柱がコンクリートでできておりまして、その上に鉄骨で編んだ麦藁帽子のような屋根がかかっていくと。それだけがストラクチャーでありまして、このスクリーンというのは幔幕のように、いつでも取り替え引っ替え建て込んだり外したりすることができるといわけです。

上からご覧頂くとなおそのコンセプトがおわかり頂けると思うんですが、こういった部分が1つの渦に相当するものである。その間に風が流れたりヨットが流れたり人が流れたりしていくような空間ができていくわけだろうというわけです。

実際に、大変薄い素材でできておりまして、このファサードと言いますか、中庭の前面に張られているのは、かつてのすだれと考えて頂ければいいわけですね。上には実際にテントが張られております。はい。

床は全部敷き瓦でありまして、これは最初とにかく土間を造るんだ。土間という最もプリミティブな床にたち帰って、そこで暮らし初めてみよう。それからカーペットが必要になり、木の床が必要になったら、それが後から建て込んでいけばいいじゃないかということです。ご覧のように上も倉庫の荷降ろし場に使われているようなテントを、可動のテントを張ったわけです。はい。和室等もこの敷地に以前から建ってありました古い住宅の建具等を転用しているわけです。はい。それからこれはダイニングですけどね、ここでもまたすだれのようなアルミのパネルが造られておりまして、向こうにかすかにキッチンが透かし見えるかと思います。はい。

ですから、ここではこういう古い家の建具も使われていれば、アルミもある。ステンレスもあると。何かモダンな材料だけを使うということじゃなくて、我々の都市の回りに在り合わせの物を使いながら、もう1回何かそれらを組み合わせて我々の居住環境を

造っていこう。そういったような大変こう、ある意味ではリラックスした考え方で住居を造ろうとしているわけです。はい。キッチン等も我々は直ぐシステムキッチンというような、大変高価なキッチンを想像するわけですが、台所なんてもともとテーブルだったんだ。だからここでは1枚、とにかくベニヤを置いてみよう。流しをそこにしたら、その下に椅子の梶を支えるためのフレームを作ればいいじゃないかといったような、大変ラフな考え方で造っているわけです。明りについてもそうです。とにかく裸電球をぶら下げてみよう。そこから考え始めようというわけです。はい。

ご覧のように町の中にシルバーに収まっているわけですが、現代の森へ行って集めて来る。かつての人達は森の中に行き木を集めて来て、自分達で家を作ったんだと。我々は今日の東京のような都市の中をうろついて、何かを集めて来て、そうやってそれらを組み合わせて、もう1回プリミティブな住宅を考えてみようというわけですね。

これが我々が住んでいる都市であって、最初に申しましたようにここにはいろんな物が流れていると。電柱があり、高速道路があり、その下をまた道路がオーバブリッジ、人の歩く歩道橋がある。こういう様々な錯綜とした流れの中に、何か1つの建築物を造っていく。それはこの流れを堰き止めることではなくて、その中に1つの渦、これほど混沌とした環境にあってもその環境の中に、隣もいつか合ってしまうかわからないといった環境の中に、非常に相対的に物を造っていくことじゃないだろうかと思うわけです。



次のスライドです。そんな流れを表現したいと思って造りましたプロジェクトで、これはノマドという商業的な建築です。この建築は本当に作った時から3年ぐらいしか存在しないかもしれないと言われながら造ったわけで、そういう意味では本当にテントを張るぐらいの軽い気持ちで造ったわけですが、はい、実際には町の中でテントを張るというのはなかなか難しいことでして、実際にはこの建築は鉄骨の屋根を葺いてありまして、その下にご覧のようなインテリアとして風であったり、雲のような流れを表現しようとしたわけです。これはそこでお能が行われた時の写真ですね。

それで今度はその屋根を取り去ったらどうなるだろうか、次のスライドです。それはまさしくお能の劇場のイメージモデルなんですけれども、ここでまさしくイメージモデルで、これが建築になっていくためには、これからいろんな段階を経なくては行けないわけですが、最初に考えましたことは、ただ旗が風にひらひらと舞っているような、そんな建築をイメージしたわけです。何かこう、流れに逆らわず、かつ流れるまんまでもない。そんな中間的な状態が建築にできるといいなあと思うわけです。



次のスライドです。これは形は割合固い形をしておりますけれども、これもまったく環境そのものを1つの視覚的なオブジェクトに置き換えたといったプロジェクトで、これは横浜駅の西口に建っております小さなタワーで、「風の塔」というタイトルをつけました。この下は西口の地下街になっておりまして、ここに古くからコンクリートの高架水槽とベンチレーションのためのタワーが建っておりまして、それが大変汚れてきたのでそれを改装しようというコンペティションだったんですね。それで私どもの案は、その外側にミラーを貼りまして、更にその外側をご覧のような穴の開いたアルミの筒で楕円形に折ってしまったわけです。ですから昼ご覧になると、大変そっけない武者筒のような筒が建っているわけです。はい。それで夜になると一転しまして、中にさまざまなライトが入っておりまして、これはちょうどネオン管なんですけれども、ネオンが点きますと中が明るくなるのでアルミのパネルが透明なプラスチックの幕のように変わっていくわけですね。しかもこのコンクリートの本体には鏡が張っておりますので、このコンクリートのタワーの存在が失われて、ちょうど中が空洞のように見えてくるというわけです。ここには足元に小さなコンピュータが置かれておりまして、その上に置かれた風のセンサー、風向、風速を計るセンサーと、それからこの周辺の車のノイズ、騒音を計るセンサーとから送り込まれた情報が視覚的なパターンに置き換えられまして、いつも光の変化として映し出されているわけですね。これもですから、最初に申し上げましたように、我々は体ではいろんなことを既に感じているんだけど、まだそれが視覚的になっていない。そんな体で感じたものを、あるフィルターを通すと視覚的なパターンに置き変わるというコンセプトをそのままオブジェクトにしたというわけで、ここではタワーといってもモニュメンタルなタワーを造ろうということじゃなくて、昼間から夜にかけて表情が変わっていくということが1番面白いと思ったわけです。

今のような大変混沌とした都市の中では、我々はどうしても何かその混沌さを圧倒するような強いものを求めがちなんですけれども、このコンペティションの時にも、他の作家の人達は大変強さを求めて形を作った。だけどこの周辺は本当にネオンがギラギラしているような環境で、そこでどんなに自分が形を主張しようとしても、それはもう環境に押し潰されてしまう。むしろその環境に半分は流されながら、且つその環境よりは少しきれいだと、何かちょっとあれは違ってるぞといったような、そんな物を造りたいというも思います。

これはやや誇張されていますけれども、私達が都市の中を歩いている時には、大袈裟

に言えば万華鏡の中を歩いているようなものだ。この中からいろんな事を汲み取って、それをあるフィルターを通して形に、まあ造形的な表現に置き換えていけば、今日の建築ができて来るのではないかというわけですね。

次にご紹介するのが、先ほどはたと茫然と立ち止まったという北海道のビール工場のゲストハウスのプロジェクトです。この白いところが工場でありまして、その奥に7ヘクタールぐらいの敷地がありまして、この造園を含めて1つの建築を含んだ環境を作りたいという企画がありました。これはビールの工場を見学にやって来た人達が、その見学者の通路を辿って、この地下の、半地下の通路に入ります。この半地下の通路を辿ってここにありますゲストハウスにやってくるわけです。ここでおいしいビールを飲みまして、あるいは食事をしまして、そこからこの広場へ出まして、少し掘り込まれた広場を歩いて、それから周辺の庭を散策すると。この池の周辺にはバーベキューをするような小さなパオが幾つかあります。

建築本体というのは土に埋まっているわけです。この上は実際にはコンクリートのスラブの上に土がかぶせられてグリーンになっております。ただしこちらの広場に面した所だけが地上に出ているような印象を与える。ですからずっとその地下の通路を辿ってやって来た人は、このゲストハウスに入って初めてここでグリーンのある環境に面するというわけですね。

これが工場と今のゲストハウスを結ぶ半地下の通路でありまして、ここでも菅野さんという作曲家に依頼しました環境音楽が聞こえてきてまして、その中をちょうど水の中を歩いて行くようにゲストハウスへやって参ります。エントランスホールの上にトップサイドライトがとられておりまして、ここからの光がエントランスホールに広がる。そこで外から直接やって来た人と今の通路をやって来た人がここで出会うことになるわけです。これがそのエントランスホールの下でありまして、ここは直接外からやって来た人のエントランス、左側が今の通路から入って来た人のエントランスというわけです。

ビールを飲むスペースでは天井に星空が描かれております。こちらは青空が描かれていますレストランですね。空調の吹き出し口が独立して立っています。パーティションも布で作しまして、先ほどのこれこそ幔幕そのものであるわけですね。それからここはちょっとレストランの奥の囲まれた一部屋ではありますが、ここでは天井に布を張りまして、ちょっと別の表情を作ってみようと思ったわけです。この椅子は我々はブルマチェアと呼んでいるんですが、大橋晃朗さんというデザイナーに作って頂いたものです。

それでそれらのレストランがこの窓側に並んでおりまして、そこから外に出て参りますと、ご覧のような小樽の倉庫街を構成している石を敷きつめた広場に出ます。ここで時々コンサートなんかが行われる。これはもともと地形はもうちょっと高かった。2、3メートル掘り込んでこの広場ができています。それで遠望いたしますと、ちょうど緩いすりばち状にこの広場がありまして、その手前側に、グリーンの上に何か街灯のようなものがたくさん立っておりますけれども、これは田原桂一さんという著名な写真家がおられますが、この方が造られた光のオブジェでありまして、この独立した柱は全部プリズムで、後ろからライトが当たるようになってます。ですからこのガラスは最初のプロジェクトで申し上げました液晶の入ったガラスで、今ちょうど不透明な状態ですね。これが電氣的に透明から不透明に変わります。

それらを組み合わせて、この内部で聞こえている音楽に合わせてこのプリズムと板ガラスが音に同調しながら絶えず点滅を繰り返したり、透明から不透明に変わったりするわけです。冬の間は雪に閉ざされた中でこの光だけが点滅を繰り返しているということです。はい。

来月ぐらいになりますと、花もかなりといったような、当初の意図はここまでやって来た時に、突然この花園に埋もれるような、そんなイメージを当初描いていたわけです。はい。これは池のほとりのバーベキューのための小さなパオです。



このスライドは今のゲストハウスのプロジェクトとほぼ同じようなコンセプトで造りましたフランクフルトの幼稚園です。現在、フランクフルトの方の建築家が現場に入るための作業をしております、この秋に着工する予定であります。これもまたもともと平坦な敷地だったんですけれども、ここに1枚、大きな彎曲する擁壁を立てまして、そのこちら側、道路側の方を土を盛ってしまったわけですね。逆に擁壁の反対側は少しスキ取りまして、ちょうどお母さんが腕を広げたような状態を造る。その腕の中で子供が遊ぶといったイメージを作ろうとしたわけです。

ここに釣屋根の柱が立っておりますけれども、これはちょうど何か木がたくさん立っていて、その木陰で子供達が遊ぶといったイメージです。ここから全ての人はアプローチしていくわけですね。これがプランでありまして、このアプローチを辿ってこの中に入る。本当にこの壁を1枚立てただけでも、ここに囲われたそれだけで空間ができる。その間に教室を点在させていこうというのが、このプロジェクトです。こちらに地下に潜ったように天井だけがトップライトでおおわ

れている、スカイライトでおおわれているスペースがありますが、これは多目的室、ここで遊んだり昼寝をしたりするわけですね。こちらに飛び出しているのが工作室と図書室です。

最後にご紹介しますのが、この隣で工事中の博物館のプロジェクトです。これも今、ご紹介しましたゲストハウス、あるいは幼稚園のプロジェクトとはほぼ同じコンセプトでできあがっております。先ほど、最初に申しました広い道路がこの前面にありまして、この道路と向かい合って松濱軒というエレガントな建物が建っていると。それでこの裁判所を挟んで、次が今、皆さんがおられる厚生会館になるわけですね。それに対して、できるだけその最初に申しましたように、建築を後ろへ向かって引き上げて行くと。前面はできるだけ抑える。それからまた水平のラインを強調することによって、こちらの松濱軒の非常に水平性の強い伝統的な建築に合わせようとしたわけです。ここでもまた、平坦な敷地だったんですけれども、ここに対角線上に擁壁を立てまして、そのこちら側に土を盛っているわけですね。その擁壁の向う側に建築の台を置いている。この上に乗っておりますのが収蔵庫でありまして、本来ですと、収蔵庫というのは地下に置くべきかもしれないんですが、皆さん、ご存知のとおり、八代という土地は干拓地でありまして、この松濱軒という建物ももともとは海辺に面していたというわけですね。ですから地下水位が大変高くて、地下室を作ることができないというわけで、逆に1番上へ上がっていったわけです。

これは上の方のプランでして、この緩やかな、ちょうど人工的に、アプローチの方から見ますと、小さな丘ができたような格好になっておりまして、その丘の上に皆さん、上がって頂く。今、前の写真でご覧頂いた、緩やかなスロープを辿りまして、2階へまず上がって頂くわけですね。これは非常にゆるやかなスロープで、車椅子の方でも十分ご自分で上がって頂けるような勾配となっております。そしてここから建物に入りまして、この2階の一带がエントランスホール、比較的ガラスに囲まれまして、こちらの松井神社でありますとか、図書館の前の比較的緑に囲まれた環境を眺めるように、この向きもいろいろ検討したんですけれども、正面よりもこちらに向いた方がどうも景観がいいということから、こういった向きになっていったわけです。

それでエントランスホールから導入の展示が始まりまして、ここに点線で書いておりますのが妙見祭の行列、10分の1のスケールの500体ぐらいの人形がならぶことになっております。その脇に、ここは小さなレクチャーホール、講義室。それから特別展

示の部屋が続いております。1 番先端にはコーヒーショップがありまして、ここから先ほどの話じゃないですけども、若いカップルの方が来られて、ここでコーヒーだけを飲むこともできるわけですね。それでこの妙見祭の行列を見、ここでビデオを楽しみながらエレベーター、これも全部シースルーのガラスで囲われたエレベーターなんですけれどもエレベーター、もしくは階段によって地下に、地下と言いますか地上なんですけれども、地下のような展示室に降りて頂くというわけです。後ろの方が管理関係になっておりまして、これは2階ですから事務室ですとか、あるいは学芸員の部屋、会議室といった部屋が並んでおります。

模型で上の方の屋根を取り去った部分でありまして、今、ご覧頂いたようなスペースがご覧頂けるかと思えます。ちょうどこの小高い丘の上に登って、ここで涼んで頂くといったようなイメージであります。

そうやって下に降りて、もう1度下に降りて頂きますと、ここが常設の展示室でありまして、ここはもしお時間ある方は、この後、シンポジウムが終わった後、現地を見て頂くと、ちょうどもうこの辺ができ上がって、躯体ができ上がっておりますが、ちょうど林の中に木がたくさん立っているように、ランダムに柱が立っておりまして、これはこの点線の部分が柱頭でありまして、梁のないスラブ、無梁板で支えられております。その間を、ちょうどその林の中を散策して頂くように展示物を見て頂く。歴史、民族、自然といった八代の様々なものがこの間に展示されております。この局面の壁には一切展示はありませんで、全てメインは大体1メートル×2メートルぐらいのガラスのケースに納められた展示物がその間に並ぶことになっております。ここに熊本大学の方で復元して頂いておりますこのお隣のお城、八代城の復元されたモデルがケースの中に納められることになっております。

それからこの囲われた一角が、ある意味ではこの博物館の1番の目玉とも言いますか、松井家の宝物をお借りして展示されるための松井文庫の部屋でございます。更にこちらから休憩がてら屋外の展示場へも出て行くこともできるというわけですね。後ろの方は管理関係のエントランス、ここに1階に特別の収蔵庫がありまして、それから物の搬入はこちらの搬入口から入りまして、このエレベーターを使って上へ上げて頂くというわけです。

今、ご説明したその実際は、1階がこちらにあります。それでこの機械室だけが地下室のような扱いで、上に土をかぶっているわけですね。その上に先ほどシルバーハット

という住宅をお見せしましたが、それを大きくしましたような、トラスを組んだ鉄骨のフレームのボルトの屋根がありまして、その奥に、今、ご説明した階の上にもう1層スタジオが、撮影のためのスタジオとか作業室がございまして、そこから更に上がると収蔵庫が1番上に乗っているわけです。この収蔵庫もできるだけ新しい蔵というイメージで、外側はステンレスに包まれまして、非常に軽快な表情で宙に浮かんでいるように造りたいと思っているわけです。

これは裏側の方から眺めたところで、屋根は今鉄骨屋さんで造っているところですけども、こういった壁、ここまでのコンクリートの部分がちょうどできあがった状態です。

ところでこの設計は、こんなボリュームのスタディから始まりました。これからいくつか設計の途中経過をご覧に入れたいと思います。市の方からご要望のあった幾つかの展示室のボリュームを並べて、それらを組み合わせて行くと、最初、こんないかつい、ごついモデルになったわけです。とにかくできるだけ前面から引きを取って、それで後ろの方で高くなるようにということは、最初から意識しておったんですけども、全く五里霧中の中で造っていった最初のモデルですね。それで前面をどうしようかと、公園なのでここを八代市に大変由緒のある水をテーマにしようか。あるいは先ほど申し上げましたような丘にしようかということで、最初、我々の事務所の中でも大分議論があったんですけども、今、ご覧頂いたようなものになっていったわけですね。

この時はエントランスが1階にありまして、上の方がメインの展示場になると。それで管理関係と収蔵庫が裏に行くと、まあそれを整備するとこんなボリュームになってしまふ。ここでもちょっと描かれておりますが、この時既にこの周辺に土を盛ろうというようなアイデアが出て来たわけです。

大体こんなモデルを100個ぐらい造りまして、ああでもないこうでもないという時期がありました。それでこの辺まで来ました時に、ほぼ今の原形が出て来た。設計を初めてから約三ヶ月ぐらいの時期です。ここでもまだ水にしようか、丘にしようかということで迷っておりました。利用して頂く方にとってアプローチしやすい1階、もしくは2階を展示室とかエントランスホールに取って行くと、建蔽率の関係で収蔵庫の行き場所がないんですね。それならば逆に1番上に持って行って、逆に博物館の蔵としての機能を象徴させようというアイデアになって行ったわけです。

それでこれが市の方の方に、1番最初にプレゼンテーションをさせていただいた案で

す。ほとんど今の形の原形が出ておりますけれども、このアプローチで2階に上がる。2階がエントランスホール、小さな丘がありまして、その上にたくさん木が生えていて、その木陰で佇んでいただくようなアプローチ、それで収蔵庫がそこから上に突き出している。それからまた、ここで配置の上で大変我々が何度もやり直したのは、既存の木がご覧のようになりまして、それを極力大きな木を生かしたいと。それでその間にもこの本体を入れ込むことができるだろうかということで、大分スタディをいたしました。

これがそれから1ヵ月後に2回目のプレゼンテーションでお持ちした案でして、この屋根が最初はフラットだったんですけれども、これが波打つような屋根に変わっております。それから収蔵庫が四角いものから少しカーブを持った、比較的奥行きの高い天井の低いものになっております。最後まで、この収蔵庫の扱い、この形をどうするかということで我々も大変悩みまして、ここで2、3ヵ月、また時間を費やしたようなわけです。

それからこれが第3回目のプレゼンテーションで、ほとんど実施案に近い形になっていったわけですが、ここではまだ屋根が1方向だけに流れておりまして、それから収蔵庫もご覧のような形をしております。これは現代の蔵なんだから、コンテナのようなものだろうと、コンテナを表現しようかというようなことを考えたわけです。それからこの丘の手前では、ちょうどこの頃発掘調査がここで行われておりまして、武家屋敷の跡等が出て来たものですから、それを丘の途中にプランとして少し何か記してはどうだろうかといったようなアイデアもありました。ここに古い井戸の跡がありまして、これは保存されることになっております。

それでこの構造計画を木村俊彦先生という、大変有名な構造家をお願いいたしまして、多分この鉄骨は相当軽快なストラクチャーになると思っておるんですが、大変ある意味では難しい、特に最終案では屋根の方向が少し途中で変わっておりますので、この辺のジョイント等には大変難しい部分がありまして、それらを今、鉄骨屋さんが本当に生死を賭けてというぐらい一生懸命やって下さってます。これが最終案でありまして、この収蔵庫、実際にはこの両端は上の金属だけで包まれた部分なんですけれども、ご覧のような形で、少し丸みを帯びている。何と言いますか、航空機の胴体のようなイメージになっていったわけです。と同時にこの屋外の計画もこの頃大分スタディをしまして、これは今日、ここにも来て下さっております若い女性の、アメリカ人のデザイナーでナン

シー・フィンリーさんという方を煩わしまして、このランドスケープの計画をスタディして頂きました。例えば、ここはちょうど通りに面してバス停があるんですけども、そのバス停の所に1段フラットな部分を造りまして、ここは街の方が利用していただいて、彫刻を置いたり、ちょっとしたインスタレーションをしながら、バスを待ちながら、ここが屋外展示場のようなことになればと思っているわけです。

ほぼこれに近い、今は回りに柵で囲われておりますけれども、ほぼこれに近い形で完成するのではないかと考えております。何とか市民の皆さんにご満足のいけるようなものにしたいと考えております。

司 会

皆様、大変長らくお待たせいたしました。それではただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。まず講師の方々をご紹介します。コーディネーターは建築家で、「くまもとアートポリス」コミッショナー事務局の八束はじめ様です。続きましてパネリストの方々をご紹介します。まず国立八代工業高等専門学校助教授の桂英昭様、神奈川県都市部都市計画課の越沢明様、そして八代市建設部都市計画課長の鶴山崇様、最後になりましたが、先ほどご講演頂きました伊東豊雄様にオブザーバーをお願いしております。

それでは八束様お願いいたします。

シンポジウム

八束 はじめ 八束でございます。最初に私の役割をご説明させていただきますが、アートポリスの細かい仕組みに関しましては、多分お手元にいろんな資料が参っておりますので、改めて細かいことを申しませんけれども、基本的にこのプロジェクト自体が、細川知事の発案になりまして、私の師匠ですけれども、建築家の磯崎新さんに知事からコミッショナーという立場でこのプロジェクトを推進して欲しいという依頼があったことから、このアートポリスが3年前に始まっております。

それで私、磯崎さんに命じられまして、一応コミッショナー事務局を切り盛りと言いますか、実質的にいろいろなことを動かす立場をやっております。このアートポリスシンポジウムというものも毎年、大体今まで10月でしたけれども、今まで2回は熊本市で、3回目の今度は八代市で、立場上、毎回何となく司会役ということで務めさせて頂いてますが、多分単なる司会というよりは、私もどちらかという議論に参加した方が楽しいので、後で同じ立場でお話しをさせて頂きたいと思っております。

今日のパネルディスカッションですけれども、まちの創造と再生、くまもとアートポリスのまちづくりというふうなタイトルがありますように、1つは「くまもとアートポリス」自体は基本的には造形の運動である。あるいは文化の運動である。これは必ずしも建築には限りませんで、例えば橋梁であるとか、先ほど紹介がありましたけれども、トンネルの換気設備であるとか、いわゆる建築物の範疇に属さないものに至るまで、伊東さんの講演のタイトルにありますけれども、環境を形成していくいろいろな要素をデザインをしていこう。あるいはそれにアイデアを盛り込んでいこうという主旨でやっているわけでございます。それに対していわゆる町づくりという、ここ何年でしょうか、数年、大変ポピュラーな言葉になった、やや制度的な臭いの強い都市計画という言葉に代わって、手作りでいろいろなアイデアを盛り込んでいくというイメージが入って、まちづくりという言葉が使われるようになったわけですが、今日のシンポジウムはその造形的な運動としてのアートポリスと、一般的に言えばかなり制度的ないし、ソフトの部分が大変強いまちづくり。その接点がどこにあるか。当然、アートポリス自体は単なる一品一品の芸術的なモニュメントを造っていくということだけで止まってはならないというふうに我々は考えておりまして、県から始まってこれが、先ほどの伊東さんのお話しにも1つのあり方が出ていましたけれども、回りに環境を形成していく。あるいはそれに刺激を与えることで、街の目に見える、あるいは目に見えない部分を形成して

いく。かなり特異なまちづくりの手法であるというようなことが言えるだろうと思います。

今回は越沢さんと鶴山さん、お二人とも都市計画畑の方で、いわゆる官庁に身をおいてらっしゃって、日々まちづくりを实践されていらっしゃる方と、それから伊東さんや私や桂さんのように建築を設計するようなことから、まちづくりにどうやって関わっていくかということを考えている人間と、いろいろこうありますので、その辺の接点がうまく浮かびあがって来ればいいなというふうに思っております。

今日のディスカッションのやり方ですが、パネリスト3人にそれぞれ若干のプレゼンテーションをして頂きまして、その中で出て来た幾つかの問題点を伊東さんも含めて5人で議論していくというふうな形をとっていきたいと思っております。パネリスト、プレゼンテーションの順番ですが、越沢さんにスライドを用意してきて頂いていますので、最初に越沢さんをお願いして、次に鶴山さん、最後に桂さんと、ちょっと紹介の順番と変わっていますが、そういうような形でそれぞれお話しを頂きたいと思います。

それでは越沢さんの方から、トップバッターということで早速お願いします。

越沢 明

それでは早速ですが、トップバッターということで話題を提供したいと思います。皆さんこの会場の上に都市にデザインをと、そういうスローガンが掲げられておりますが、これは私、非常に大事な言葉であると思いますし、また今後のまちづくりにおいて、日本のまちづくり中では非常に重要な考え方だろうと思っております。

現在、非常に全国各地の自治体で都市デザイン、あるいは都市景観ということで、いろんな試みがされるようになってきましたが、その中でもですね、一番恐らく長い歴史を持っておりますのは横浜であります。かれこれ20年ぐらい経っておりまして、その中でいろんな試行錯誤と、いろんな展開がなされてきました。そこで今日は横浜ではその都市デザインがどのようにして展開して来たのかというところをご紹介します中で、この今日のアートポリスシンポジウムであります都市デザイン、この問題について考えて行きたいなということで、トップバッターということで話題を提供したいと思います。

時間は約20分程かけまして、大体スライドを使いますので、ご覧になるとわかるということも随分あると思っておりますので、そういうことで早速入りたいと思います。

これは横浜の都市デザインの発端になった場所であります。これは関内駅と申しまして、ちょうど国鉄、今のJRの1番横浜の都心部に関内駅というのがございますが、ち

ようど横浜に古くからある中心市街地であります。ここに現在、掘割式的高速道路が通っております。ところがこれは20年前、当初の計画では高架でありました。ところがこれは市街地を分断して、景観上非常に良くないということで、今ではですね、こういう道路についての景観問題というのはある程度常識化しておりますが、当時としてはとんでもないということで、いろいろな国を含めてやりとりがあったんですが、結果的には掘割にした。それが実は横浜の都市デザインの1番発端となった事件であります。次、お願いします。



これが今、ご紹介した関内駅であります。その第2弾が実はこの下に地下鉄が通っております。地下鉄を建設した後ですね、これは埋め戻しになると。通常ですと、ここは普通の道路になるんですが、ここで議論になりまして、ここは駅の前でしかもこれは横浜の市役所の庁舎であります。そのような人が多く集まるような場所について、やはりこれは歩行者中心に考えようということで、実は歩行者専用の広場にしましたわけです。実はこれはくすのき広場と申しまして、ちょうどこれは熊本の木のようにすけれども、楠を植えて歩行者線を変えた。これもですね、実は役所の中で議論がありまして、当時、都市デザインを考えようという、ようやくスタッフができたばかりの時代でありました。じゃあお前達、そんなことを言うんなら設計してみろということで、急遽2週間で自ら設計した、役所の中でやった設計であります。



これが実は、非常に好評になりまして、実はここで隠れておりますが、この植栽の直ぐ後ろに市役所の駐車場があります。それが見事に隠れてるんですね。これが実は非常によろしいということになりまして、この実例が基になりまして、ようやく横浜市中でも都市デザインというものが重要であるということの認識が始まった、記念すべき事業であります。それと同時にですね、続いてやりましたことが、実は歩行者がもっと市内を歩けるようにしようということでありまして、今、ご紹介しました関内駅、これです。これは高速道路の場所なんですが、横浜の中心部全体ですね、つまり歩行者が歩けるようにということで、このプロムナードということで、ここで歩道をきれいに舗装したり、タイルを埋めたり、案内板を作ったりということをはじめたわけです。これが第3弾になりますね。次のスライドをお願いします。

これはそのデザインされた案内板ですが、これは有名なデザイナーの造ったものでありますけれども、こういう案内板を通して、そのきれいなタイルを辿って行くと自然とですね、横浜の中心部のいろんな場所が歩けるようにといことになっていっ

たわけです。続きましてスライドをお願いします。

それに伴いまして、実はこれは関内駅ですが、これは当時非常にきたない駅でした。これを当時の国鉄側も合わせて回避しようということで、ご覧のように非常にきれいな駅舎に変えたわけでありまして、ちょうどこの駅の前のアプローチもですね、ご覧のように歩行者専用に変えたわけでありまして。以前はですね、これは車道でした。ということとは非常に、さっきのくすのき広場がこの手前にあります。この一体となった歩行者空間ができ上がって来るということになったわけでありまして。次のスライドをお願いします。

そこでですね、もう1度この横浜の歴史に舞い戻りますと、今、お話ししました関内駅がこの中心部であります。この当時、海に囲まれた一帯がですね、横浜の幕末の開港した居留地でありました。つまり外国人がなるべく日本人と接触しないようにということで、当時、ももとの東海道と離れた場所に居留地を造ったわけでありまして、そのようなことでこの中心部にですね、当時の外国人居留地の面影とか、いろんな当時の幕府とかですね、イギリスの建物とか、そういう遺産がまだ残っております。この中心部ですね、これは当時ですね、1度木造家屋、横浜市は丸焼けになりました。その後に真ん中にですね、防災用の防火ということで広幅員街路を造りました。次のスライドをお願いします。



それは日本大通りという名前なんです、これが現状であります。ご覧のように非常に大きな並木が育っておりまして、幅36メートルですが、これが実は日本で最初の都市の本格的な並木道、英語とかフランス語ではブルバールと言いますが、日本で最初のブルバール、アベニューであります。実はここが神奈川県庁で反対側がわにイギリス領事館があるという、横浜の官庁街であります。



続いてどうぞお願いします。これが実は神奈川県庁であります、1度関東大震災で壊れました。その後再建したもので、昭和2年の建物であります。実はこの色を見て頂きたいんですが、これは茶色ですね、スクラッシュタイルというタイルを貼っております。この茶色というのを実は覚えておいて欲しいんです。実はこれがあるということが今の、横浜都心部のカラーデザインの基になっているということでもあります。

続きましてお願いします。実はこの神奈川県庁のちょうど向かい側です。当時、日本で1番力のあった外国というのはイギリスでありまして、日英同盟がありましたから、ちょうど対面の場所にイギリス領事館がございます。いずれも美しい建物ですが、現在、

市が買い取りまして、市が港の開港の歴史を記念する博物館に転用してあります。

次、お願いします。これは全景です。これはさっきの神奈川県庁です。それでこれはイギリス領事館でありまして、実はですね、これを基にこの手前をですね、広場化したしました。



スライドをお願いいたします。これはその全景でありますけれども、これがイギリス領事館の跡ですね。手前に展示用のスペースを作りまして、ここはですね、もともと変形交差点の余剰地でありました。つまり道路の余りの土地をですね、広場に変えたということでありまして、つまりこの旧イギリス領事館と一帯となった、つまり日本ではよくですね、日本の都市には広場がないと言われますけれども、その広場を造ったわけがあります。つまり過去の遺産の上に、積み重ねとしまして、非常にモダンなデザインの広場を造ったと。それによりまして、実はここはもし横浜に行かれるとわかると思うんですが、ほとんど毎日のようにですね、いろんな写真のモデルの撮影をやったりしております。つまりそのような場所ができた。つまりモデルの撮影をするような、あるいは映画のロケに使われるような場所が生まれたということ自体が重要だったわけです。

次をお願いします。実はですね、これも今の開港記念館、旧イギリス領事館の目の前の場所にありまして、日本では珍しくファサードが揃っておりまして、しかも茶色のタイルだけです。同じ昭和初期ですね。これは税関になりますが、つまりこのようなストックがあるということが実は今の横浜のカラーコントロールの基になっているということとであります。

スライドをお願いします。これは今の開港広場のもう1回の姿であります。最近ですね、このイギリス領事館の奥に教会があります。これは借景になるんですね。それで真ん中の敷地をですね、市が買い取りまして、邪魔されないようにということにしまして、実は夜、ライトアップをしております。ですから夜も非常に美しい光景になっておりまして、若者のデートの場所となると。それから背後の新しいビルディングですね。これは建ってまだ数年ですが、ご覧のように茶色の同じ色のタイルを貼らせまして、つまりデザインのコントロールをして、一体の雰囲気を保つようにと、つまり過去のストックのもとに新しい都市デザインの指導をしたという場所であります。

スライドをお願いします。これは先ほどの日本大通りの全景であります。ちょうどこれは銀杏で隠れておりますけど、これが神奈川県庁。この反対側に旧イギリス領事館がございます。これがですね、実は検察庁なんです。たしかに高さは高すぎるというき

らいもあるんですけども、この新築にあたってはですね、やはり周囲の雰囲気にもマッチするようにということで、茶色のタイルを貼って貰っております。ですからこの一帯は非常に茶系で統一されておりますということでもあります



スライドをお願いします。今、お見せしていた場所がここの場所ではありますが、そのすぐ脇に山下公園があります。関東大震災の時に横浜市街が瓦礫の山になり、その瓦礫を捨てた場所を再利用して、日本で初の海浜公園、つまりウォーターフロントの有効利用を実現させた由緒ある公園であります。今でも非常に良い場所ではありますが、実はこの山下公園があるということにおいてこの背後の建物がですね、この10年、建て変わらして、非常に良いホテルとかですね、いろんな商業センターができております。つまり過去のストックの上にこういうような良好な建物ができると。民間の建築活動を融通したということでもあります。

スライドをお願いします。これが今の山下公園、右手が山下公園、緑でありまして、これが関東大震災跡に植え替えた銀杏、もう60年経っております。ご覧のように非常に大木に成長しておりまして、この緑のトンネルの片側に実は近年ですね、この10年間に非常に良好な建物が建てられました。それを都市デザインということでいろいろ指導をして誘導したわけであります。



スライドをお願いします。その1つの典型であります、これは実は県のホールであります。音楽でありました。手前がですね、県と市で造りました産業貿易センターであります。まず官公庁の建物が率先しようということでありまして、山下公園前に大きく広場を取りました。従いまして、このホールに入らない人も自由に入れる。つまり都市に新しく広場を造りまして、ペアになっておりますので、ペア広場と言うことで、もともと公園がある。街路の大きな並木がある。手前に、建物の前の前庭があるということで、一体となった大きなオープンスペースを作り出したわけであります。

スライドをお願いします。隣の建物です。これは今、横浜で1番高級ホテルであります、日本航空のザ・ホテル・ヨコハマというホテルであります。これも当初の案は、これはもともと山下公園の歩道です。実はタイルを植え替えたのはさっきのプロムナード化の計画であります。御影石を植え替えて、非常にきれいな舗装をいたしました。その後にもともとここからここが民有地であります。当初、日本航空はここまでホテルを建てたいという案を出していたんですが、横浜市がせっかくさっきのようにですね、県とか市が率先してオープンスペースを作っていると。だからおたくの方も作ってくれとい

うことで、下げて貰ったんですね。その条件にですね、これは公開空地と申しますが、公開空地を取った条件で建物を若干高くしていいですよということをやりました。

スライドをお願いします。これがその証拠のプレートが残っております。こういうことで建物の周辺の民有地がですね、公開空地ですよということで、勝手に増築もできません。四六時中出入り自由であります。その条件で、若干建物を高くしたということです。



スライドをお願いします。従いまして、ここまでが元の歩道の場所でありまして、ここからここはですね、実はホテルの土地なんですね。この大きなヒマラヤ杉も実はホテルの所有地にあります。ところがこういう大きな並木があることによって、非常に良い空間が生まれておりまして、結果としてこのホテルは良かったですね。雰囲気が良いもんですから、いろいろお客さんが入って来るということで、現在ではホテルの利害すると言います。つまりホテルの高級化するイメージに合ってるわけではありますが、当初はですね、なかなか理解が得られなかったということで、業者が率先してやった場所であります。これをお見せした歩道橋はですね、この山下公園から川を渡りまして、反対側の外人墓地とかですね、元町という非常にオシャレな商店街がありますが、そこに続いていく歩行者専用のデッキであります。これもご覧のように茶系のタイルで非常にきれいな舗装をいたしまして、やはりここは観光名所になりましてですね、土日は人が集まって記念撮影をするような、つまり記念撮影をしたくなるような美しい歩行者用のデッキを造ったわけです。通常の街路にありますが歩行者の横断橋というのは非常にいやで、歩くのもいやな場所が多いわけですが、これは非常に美しい場所を造りまして、人がなるべく歩きたくなるような場所を造った。しかもそれと同時に、これは実は高速道路でありまして、東京に行かれた方はわかると思うんですが、東京都内の高速道路は非常にみにくいんです。パイプが出てまた黒っぽいし、またいやらしい。これはですね、全部パイプを隠しました。ですからこの横浜市の施策と協力しまして、首都高速道路公団がですね、東京都内でやっていないような質の高い事業をいたしまして、その結果、これは土木学会賞の表彰を受けたわけですが、非常にすっきりしたデザインになっております。この結果、都内の高速道路も改修を始めました。つまり、これは一連のアーバンデザインがですね、非常にハードの土木施設にも影響を与えたわけであります。



スライドをお願いします。この歩行者デッキの場所ですね。辿り着く先が実は公園であります。通称フランス山と言いまして、これは幕末に元フランス領事館があった場所でありまして、関東大震災の時に壊れた場所でもあります。そこを横浜市が買取りまして



公園化したんですが、その壊れた建物の跡です。RFとあります。これは英語で言いますとリパブリック・オブ・フランス、つまりフランス共和国のマークであります、フランス領事館の建物も上に貼ってあったマークを保存いたしまして、それをはめ込みました。だからここは過去はフランス領事館でしたよという歴史の雰囲気を保ちながら、新しいこういう歩行者用のデッキを造りまして、公園化した場所であります。

次をお願いします。同時にですね、これが今、お見せしました高速道路であります、一体の色で、これも茶系のタイルであります、トイレをつくりました。最近、熊本市を始め、全国でですね、トイレを美しくしようという運動が盛んでありますけれども、これは実はこの美観修景と一体でやったものであります。ですから美しいトイレを造りますと、なかなか汚さないということがあります。



スライドをお願いします。同時にですね、このトイレの直ぐ脇が元町モールと言いまして、非常にオシャレな商店街でありまして、ここもモール化事業をした結果、車のコントロールをいたしまして、さらに人が来るという場所になりました。

次をお願いします。ご覧のように非常に舗装も工夫いたしまして、こういう若者が集まって来るという場所になっております。次をお願いします。同時にですね、この元町モールの直ぐ丘の上が外人墓地です。

スライドをお願いします。その外人墓地の目の前にはですね、元の洋館を移築しまして、こういうカフェテリアができているということで、なかなか土日デートコースで集まって来ると。またそういう集まりたいという場所を作って来たわけであります。

スライドをお願いします。このモール化ということでは実は先ほど高速道路を地下化した場所の直ぐ側で、馬車道という場所がございます。これは幕末に馬車が通っていたというメインストリートであります、商店街が衰退してきましたので、馬車道化というモール化いたしました。ベンチを統一デザインをしまして、ここに馬車のマークがありますが、これがモールの統一デザインということで建物にも貼っております。このタイルは茶系ということでありますが、実は横浜がこういう茶系を使った結果ですね、モール化する、あるいは都市デザインというのが茶色にすることと勘違いするという現象が全国に広がりまして、外面的な傾向だけ真似するということがあるんですが、横浜はもと今、申しましたように、茶系というのは実は都市のアイデンティティだったという経緯があったということを是非ご理解頂きたいと思います。

スライドをお願いします。ご覧のように、建て替えの時にセットバックして貰いまし

て、ここは民有地なんですね。ご覧のように同時に、建て替えの時にセットバックして貰いまして、ここは民有地なんですね。ここはレストランです。そのセットバックした結果、非常に広々した、これは元の歩道であります。これは建物ですね。一体の舗装で非常に良い雰囲気のところができきたということでもあります。

スライドをお願いします。これは銀行ですね。セットバックして貰いまして、こういうオープンスペースを作り出したということでもあります。



スライドをお願いします。これはですね、市のホールでありまして、ここも率先しましてセットバックしてモニュメントを造った。次をお願いします。そこにはですね、道路を蛇行させまして、ここが特徴なんです、実はこういうホールはですね、閉まってる間だったらなかなか人の賑わいは出て来ないということで、積極的にテナントを入れまして、これはオシャレな店が入っております。ですから賑わいを積極的につくろうということでもあります。

次をお願いします。ストリートファチャーもかなり工夫をいたしまして、こういう彫刻を造ったり反対側の民間ビル、これは住友ですが、同じようにセットバックして貰って同じ舗装をしているということで、一体として非常に良好なオープンスペースが出て来たということで、スライドをお願いします。今のホールですが、実はこういう銅板を貼ってありまして、もともとはですね、幕末の時のまさに馬車道であった時代の銅板が多く貼ってあるわけですね。つまり過去の歴史を大事にするということでもあります。そこでですね、実はこの建物を注意して見て頂きたいんですが、若干わかりにくいと思うんですが、大きなドームがある建築であります。実はこの建物は現在でも残っております。



スライドをお願いします。実はこれでありまして、これは当時の明治時代の著名な建築家が造ったものでありますが、これは現在の東京銀行の前身であります横浜証券銀行の本店であります。それが現在、神奈川県立博物館としてまると保存してありますが、これはかれこれ20年前、30年前になると思うんですが、建物を保存利用したということで全国の先進的な例でありました。



スライドをお願いします。これがあることによってですね、実はこれは県立博物館です。隣を見て頂きたいんですが、同じように生命保険会社の石造りの非常に美しい建物があります。これを最近、取り壊すことになりましたが、馬車道の商店街の人達が猛反対いたしました。何とか残してくれと。そこでいろいろ市と商店街で考えたんです。これで

は狭いと。確かに建て替えるのはしょうがない。その代わりですね、元の外壁を全部保存しようということで、一旦石を全部外したんです。これは非常にお金がかかるんですね。ところが全部花崗岩を外しまして、新しいビルを建てた後にこれを上から貼ったと。その条件付きでこういうことをやってくれたというおかげで建物の高さを若干高くいたしました。これは歴史的建造物を保存することによって、これは専門用語になりますが、建蔽率、容積率を上乘せしたと。全国で初めての例です。スライドをお願いします。非常に面倒くさい工事になりまして、非常に高くつくんですね。これを生命保険会社がやってくれたわけでありまして。次をお願いします。中のエントランスのところですね。これが実は公開空地になっております。つまり建物の中が公開空地であるという理由で建物が高くなったということになっております。



次をお願いします。これは外から見たところではありますが、県立博物館ですね。これは日本火災という生命保険会社ですが、これが外壁保存されました。非常に良い雰囲気になっております。これは馬車道ですね。もしこの建物がなければですね、いくらモール化してこういうふうにならぬ瓦にしたり、電柱を地中化したりやってもですね、やはり良い雰囲気は出ないんですね。この建物が2つあるということは、ランドマークになっているという、非常に重要なものであります。ただ残念なことに、スライドでご覧のようにここになかなか良い建物があります。これが保存できるかとなると、私は恐らく難しいだろう。つまり先の2例は官公庁が自ら修復もの、大手の生命保険会社です。その場合にはできるんですね。これは民間の中小ビルです。なかなかそこまでは恐らくできないだろう。残念ながらまだそこまではいっておりません。

次をお願いします。この日本火災ですね、ビルを建て替えたときに、高級ゴルフショップなんです、こういう雰囲気の良い店が入って来まして、それによってまたですね、この一帯の商店街の格がグレードアップすると、そういう現象が生じております。つまりモール化して都市デザインをやるということが、この商業メカニズムに乗っかってるということなんですね。

スライドをお願いします。現在、横浜市は歴史を生かした町づくりということで非常に一生懸命取り組んでいるわけです。その例です。新しい住宅地、これは三井不動産がやりましたマンションの中の集会施設なんです、これは先ほど言った外人墓地の付近にあった洋館を設計図どおり復元いたしまして集会施設にする。これがあることによってですね、このマンション全体の雰囲気、グレードを上げて、それによってマンショ

ンの価格が上がってるんですね。つまり経済メカニズムに乗った形で都市デザインをやっているということでもあります。



スライドをお願いします。これは横浜市のパンフレットですが、これを横浜市が自らまたですね、景観に貢献しているということで表彰しております。スライドをお願いします。民間の活動を誘導すると同時に、市自ら、市制100年を記念して赤レンガの復元をいたしました。スライドをお願いします。これは関東大震災で壊れたんですが、元の図面どおり復元をしております。この地域のランドマークになってるんですね。

スライドをお願いします。それでこれはまた馬車道モールであります、最近建てたビルです。もうこういうことをやるのは当たり前になってきて、セットバックをするとか公開空地を取っています。ここは非常に高級なお店が入って来ております。それによって非常にまた商店街の雰囲気良くなって来ております。スライドをお願いします。非常にこれは、ご覧のように、ここが元の道路幅ですから大分広がっております。非常に長大ですね。オープンスペースを取って貰っております。これは民家の土地ですね。事実上、歩道が倍になってるということでもあります。

スライドをお願いします。ということでありまして、最近になりますとですね、これは横浜の緑園都市という、新しい宅地開発地ですが、これは地元の鉄道会社、相模鉄道というデベロッパーが自らやってる、新しい住宅開発であります。これはですね、特殊デザインをやるということが住宅地開発のメインのコンセプトになってる。つまり民間会社が自らアーバンデザインをやっているということでもあります。

スライドをお願いします。まず駅舎自体を良くするということで、ご覧のようにですね、非常にオシャレなデザインにしております、ここもVTRが出たり、いろんな文字情報が入るというような液晶を作っております。

スライドをお願いします。これは分譲のパンフレットですが、町づくりの質はヒューマンの豊かですという、つまり豊かさをですね、分譲の条件にしている。これによってまた人が集まって来るんですね。ですから実際は大した金じゃないんですが、僅かなことでインフラストラクチャーを整備して、非常にグレードアップすることによって、また住民が集まって来てまた新しい文化が生まれるということまで言っているわけでありませう。

スライドをお願いします。そのメインがですね、これは実は鉄道の、この下に電車が通っております。電車を地下化したことによって上をですね、歩行者、長大な歩行者専用

道路を造りまして、ご覧のようにここは歩行者しか通れません。非常にこういうような豊かな空間を造ることによって、またこういう良好な建売住宅を売ってるといふことであります。これもですね、自ら始めから相模鉄道が設計して、それを条件として売ったわけです。



スライドお願いします。自ら分譲の時にですね、カラーのコントロールまでやってるんですね。こういう色を使って下さいとかですね。今、なかなか行政がここまでできないんですが、民間が自らここまでやってるといふことであります。



スライドお願いします。ここはですね、その中にフェリスという非常にお嬢さん大学を誘致いたしまして、横浜で1番良い女子大なんですが、そこを誘致した結果、またこの地域の知名度が上がる。これは大学の土地なんですが、ここは大学の用地なんです。ご覧のようにこの非常に大きな法面とこの用地ですね、全部提供して貰ってるんです。校舎が隠れておりますね。ですからこの非常に大きな空間自体も、実はフェリスに買って貰った後、事実上ですね、無償提供に近い形で地域住民に公開していると。これはオープンスペースです。この木もですね、大学が植えたんですね。事実上、並木道が幅が広がっていると。ここまでやるわけですね。



スライドお願いします。これは同じ住宅地ですが、これは相鉄文化会館と申しまして、この相模鉄道の職員の研修所であります。これはまた著名な建築家がやったものでありますが、従来はですね、この建築物だけが取り上げられてました。それで見て頂きたいのはここです。やはり同様にセットバックしまして、事実上、歩道が倍に広がって、しかも並木が植わっていると。これは相鉄が植えた並木であります。ですから2列の並木であります。ですから従来、建築というのはここだけ取り上げるんですね。ところがこういうようなオープンスペースに展開しないと、本当の良い町にはならないんです。これこそがアーバンデザインであるというのが私の考えであります。

スライドお願いします。継続しまして、これは山下公園の拡張部分であります、これは古い部分で、これは去年、市制100周年で拡張した部分であります。1階が駐車場でありまして、駐車場不足ですからその上を立体化して公園にしたと。それで良く詳しく方はご覧になると思うんですが、これはですね、スペインのバルセロナのガウディのモチーフを用いたものです。

スライドお願いします。最近ガウディの真似だけが全国に流行してるんですが、恐らくこのガウディの有名なマンションでありまして、日本のコマーシャルに出てくる、カ

サミラというマンションであります。ご覧のようにファサードが全部揃っております。前面が幹線道路ですね。高さがピッと揃っております。つまりヨーロッパの都市計画のルールに則っているということでありまして、つまりこの部分だけ取り上げますと、一見奇妙奇天烈な建築という印象を与えますが、実はまちづくりのルールに非常に則ってるんだと。従来、ガウディを紹介するのにですね、まちづくりという視点で紹介することはありません。ここだけ取り上げるものですから、みんなこういうのを建てたがるんですけども、実は都市計画のルールに則ってるんだということを是非ご理解いただきたいと思います。



スライドをお願いします。これは見事に揃ってますね。ですから実はこのデザインを簡素化しますと、なんのことはない、普通のマンションになります。スライドをお願いします。これは大阪の御堂筋ですが、日本では唯一ですね、高さが揃っておりますのは御堂筋。高さ31メートルであります。これはなかなか非常に市が苦勞してやってるんですが、全国でも珍しく美観地区という、実は都市計画に美観地区という制度があるんですが、これによりまして高さを制限しております。ところがこれほど世の中に美観、景観という時代でありながら、美観地区を指定する行政はほとんどありません。これをやるとみんな嫌っちゃうんですね。非常にうるさい規制が適用されますので、ですから実は都市のデザイン、都市を良くするというには、この地元の民間の理解の下に、また自らもですね、コントロールに乗らなきゃならないというね、やはりお互いそういうようなルールに則らなきゃならないということを、是非ご理解頂きたいと思います。

スライドをお願いします。ちょっと蛇足ですが、同じように歴史を生かした町づくりということで函館を例にとります。これは最近非常に観光客が増える場所ではありますが、これはロマンチック函館ということで、もう観光で売ってるわけであります。スライドをお願いします。ご覧の非常に良好な建築が残っておりまして、市としても一生懸命やっておる場所であります。これは倉庫群ですね。これは最近ウォーターフロント開発ということで、ちょっとこれでご覧になってもわかると思うんですが、この中にビアホールとか劇場があって、非常に今、若者が入っている場所であります。



スライドをお願いします。これは中の空間でありまして、元の建物を利用しながらギャラリーを造って、左がビアホールですね。右側がブティックがあります。

スライドをお願いします。これは銀行を利用したホテルであります。スライドをお願いします。ここになかなか良い雰囲気ですね、昔の建築のスタイルを基にした喫茶店がで

きております。スライドをお願いします。このペンションですね、要するにこういうような全体の雰囲気にあったものができて、しかもペンションとか喫茶店ということで、地元の経済活動が活性化していると、つまりアーバンデザインと地元の歴史的な遺産を、ストックを利用した町づくりによって、町が活性化しているという良い例であります。しかもこの歩道もきれいにしました。ところが問題はその後ろのマンションを見て欲しいんです。この景観を台無しにするマンションが今、建築ラッシュであります。実は昨年、建築条例、美観条例をやりまして、高さを制限することをやる直前にですね、駆け込みで一斉にマンションが建てられました。既に景観は台無しであります。要するに今、観光ポスターの写真が取れなくて弱ってるんですね。マンションがどうしても写っちゃうんです。ということでこういうものが生じてるということであります。



続きまして小樽であります。この小樽運河については皆さん、お聞きになったことはあると思うんですが、これを道路として埋める埋めないで非常に永年、20年近く論争のあった場所であります。



次をお願いします。結果としましては半分埋めまして、非常にきれいな道路を作りました。ですからウォーターフロント、あるいは美観、景観を生かした道路づくりということでは日本の最初の例であります。その結果、非常に周辺の雰囲気が良いということで、新しい建物が建ちまして、非常に観光にも役立ったということであります。この運河沿いの前面の建物ですね。昔の雰囲気にマッチした新しい建物を造りました。中はフランスレストランです。全体景観地区ということで、一生懸命指導しております。最後の建物は、これは元の古い石造りの倉庫を博物館に、小樽市立博物館に転用した建物であります。市自体も若い女性をターゲットに観光開発をしようということであります。事実、若い女性が来る。現在は若い女性に見捨てられた町というのは衰退いたします。これはバロメーターです。だから八代も熊本も若い女性がどれだけ来るかというのが、今後の勝負であります。



ところがその直ぐ側、これは今の小樽の隣港線ですね。これを見て下さい。地元の蒲鉾屋の建物です。これはいたる所、熊本のドライブインにあるような建物ですが、これをやられちゃうと雰囲気は台無しになるんですね。ですから実は、小樽もかなり手遅れに近い場所がかなりあるんだと。先ほどお見せしたウォーターフロントの直ぐ側です。

この八代に横浜とかあるいはそういうような歴史の伝統がないかも知れません。ただ現在造っておりますアートポリスの建物が、あるいは100年後に評価されるようにと、



まさにそのためにやってるんだということであろうと思います。そこですね、1つの例ということで、ちょっと視点を変えて、これはロンドンですが、これは1960年代有名だったロンドン市内の再開発のバービガンという地区であります。超高層再開発、当時流行いたしましたが、そのロンドンですね。手前に何か変な物が残っております。これは何かと申しますと、ロンドンというのは最初ローマの植民地でできた都市でありまして、ローマ時代には実はこれは城壁なんですね。ちゃんと残しております。

これは展示板であります、実はこの城壁がですね、段々建物の確認に利用されたりしてきた歴史が書いてあります。それをもう1回復元して、掘り出して来たんですね。ですからこういうロンドンの場合の遺産は城壁だったんですが、八代の場合何であるか。例えばこのお城だとか、堤防だとかいろいろあると思うんですが、必ずその町には固有のですね、歴史的な遺産があるはずですから、それを発見して、しかもそれを生かすというのが重要だろうと思います。



スライドをお願いします。これは地下鉄の工事をやってる現場であります、次をお願いします。その工事現場でありまして、実はここは元の城壁があった。必ず歴史を大事にするんですね。これは工事現場の看板です。ここまで歴史を大事にする。

スライドをお願いします。最後は、これは田園調布、東京の地価高騰で良く出てくる東京の最高級住宅地であります、これは昭和初期の当時は中級サラリーマンの住宅地でありました。次をお願いします。その特徴はこの美しい駅舎を造りまして、次をお願いします。条件をですね、生け垣を条件にしたんですね。そういう町づくりを民間の協定でつくろうとした場所であります。非常に質素な建物ですが、生け垣がきれいである。これがもともとの田園調布であります。ところが最近はいよいよの社長とかいろいろな人が住んできまして、建て替えますとですね、昔の精神が忘れ去られて、確かに建物を取り出しますと非常に豪邸であります。ところがかつての精神は忘れ去られまして、生け垣はゼロですね。確かにきれいなタイルで作っております。非常に高い建築費がかかっていると思うんですが、緑は失われておりまして、これは田園調布の過去の町づくりが忘れ去られた。つまりあの建物だけ見ると、確かに良い建物でしょうが、全体の町を造るということでは、デザインとしては最悪であります。これが現在の東京の進行中の問題でありまして、是非こういう問題を考えて欲しいということです。ありがとうございました。

八束 はじめ ありがとうございました。次に鶴山さん、お願いします。ちょっと時間が押し迫って

ますので、大変申し訳ないんですが、鶴山さん、桂さん、多少手短か気味にお願いいたします。

鶴山 崇

鶴山でございます。普段の仕事がただ都市計画の一般的な実務というようなことで、今、先生からご説明のあったような、迫力のなるようなそういう資料も持ち合わせてはおりません。しかし、考えてみますと、このような偉い先生方とこうやって討論ができるというのも、もうこれが最後かもしれないというふうに考えるならば、ひとつ突破口でも叩いてやろうかというような気持ちになりまして、そのまま引き受けてしまったというようなことでございまして、どうかお許しを頂きたいと思います。

ただ私は、こういうふうに日本中とか世界中を駆け巡るような話ではできません。実際に日本だけしかありませんもんですからわからないんですが、日頃から一般的に都市につきましての、それから景観につきまして、いろいろ考えてることもございますので、次元は低いとは思いますが、それに皆様の前でお話を申し上げたいというふうに考えております。

まず、細川知事が申されておりますアートボリスというものの中身を、私なりに絵のような街と言いましょ、絵になるようなまちづくりを進めていこうというようなことが、知事の大きな目的であろうと。そういう大構想を立てられたんであるというふうに考えております。近年、日本の経済が豊かになりますにつれまして、価値感と言いましょ、これが多様化するといえますかね、豊かさとかそれから安らぎ等が重要な要素になってきたというふうに考えるわけでございます。私達が関係しております諸施設におきましてそれは言えることでありまして、実用の段階からそれを越えまして、景観の良さだとか、それから快適性を要求される時代に入ってきたと。これは今、先生が写真で紹介されたとおりでございます。八代のこの身近なところにおきまして、道路におきましては県が施工をして頂きました、この厚生会館の直ぐ北側の八代港線といいますが、それとか、直ぐ西側の西幹線というのは、シンボルロードという名前で、かなりきれいに整備をしていただきました。これが八代の景観の始まりだということで、私は評価をいたしております。

これが3、4年前から始まりまして、これが一石を投じられたことによって様々なまちづくりがはじまりました。

まずトイレ。それから何も遊ぶ施設がないというようなことでございましたけれども、その県に刺激されまして、まず八代宮の中のトイレを、行かれた方もたくさんいらっしゃると思いますけれども、八代宮の方では3000万ぐらいかけられまして、全部整備をして頂きました。これは民活でございます。

それから今、博物館が造られております所にも、なまこ壁といひましようか、これによりますトイレを設置をいたしました。これは今回、博物館建設ということで、城趾公園の英霊塔前に移す予定になっております。そのようなことで、次から次へと波紋を広げた第一石がシンボルロードであったというふうに考えております。

それから八代市役所が計画をいたしました、市役所前からアーケードまでの緑と水のプロムナードですね。これが2年前に完成をいたしましたけれども、これは狭い道路の横に、それこそ戦争直後にできましたアパートと言ひましようか、普通の市営住宅でございましたけれども、これを除去いたしまして、そこをポケットパークみたいな格好で整備をいたしました。これは山の中をせせらぎが流れてるという感じを出そうではないか。町の中に1つぐらい、そういう場所があっても良いじゃないかというようなことでと造ってみたわけでございます、その評価といたしましては、皆さんからかなりお褒めの言葉を頂いているところでございます。

公園につきましても、今さっき言ひました八代宮を中心といたしました城趾公園の整備が進んでおりますし、それから最近になりまして、本町の緑地といひます。元豪商の弓削邸跡を買い取りまして、そこに日本式のきれいな庭がございました。これが手を入れないで荒れ放題になっていたものを、昨年市が買い取りまして、これを整備をいたしまして、皆さんに開放しております。これも街の中での公園というようなことでと、かなり評価が高うございます。ただ、現在では面積が約1600平米でございます、私達はまだまだ小さいと。これをもっと、それを核にいたしましてもっと広げ、そして皆さん方の買物の広場と言ひましようか、そういう安らぎの広場を造ってきたいというふうに考えております。

それから河川でございますが、水無川というのがございます。最近、歌にも水無川という歌があるようでございますけれども、この水無川の整備が最近、県によりまして行われております。兼良親王で有名な八千把橋までの約6キロ間を15億ぐらいかけまして、いろんな親水性のあるような、それとアメニティのあるような、そういう水辺を造ろうではないかという動きになりまして、もうかなり進んでおります。最初にできまし

たのがお祭広場でございまして、妙見神社の亀蛇が舞う所ですね、あそこを最初に造りまして、それから段々上流に上がりました。最近では八千把橋の近くまで、バラバラでございすけれども、整備を行っております、数年後にはこれが完全に完成をするだろうと。これも全部アメニティの要望によるものでございす。

それから球磨川の右岸を昨年整備をいたしましたし、行かれた方はいらっしゃいますでしょうか。堤防通りをただの堤防ではなくて、やはり皆さんの散策やらジョギングの道路、それから佇む、それから憩う道路というようなことで整備をいたしております。これは建設省と市が一体になりまして整備を進めておりますが、これはまだ今年も継続して行くと。できるだけ継続しながら、どんどん上流の方へも下流の方へも整備をしていこうというようなものでございす。

このようにして景観を良くしたり、アメニティを配慮した計画はたくさんございすけれども、これからもどんどん増やしていくというような考え方でございす。

昔話に浦島太郎というのがございすけれども、その浦島太郎の話では、乙姫様が浦島太郎を海の方へ連れて行きまして、そして龍宮城に連れて行った。龍宮城のその美しさを絵にも書けない美しさと讃えておる。そのような美しい景観とか、美しい建物だとか、そういうものにつきましたは皆さん大好きでございまして、そういうものは写真に取ったり絵に書いたりして、そういうふうにして保存をし、永く楽しもうというのが人間ではなかろうかというふうに思います。

そこで私達は良く絵本を見たり、展覧会に行きまして絵を良く見るわけですが、日本と外国をちょっと比較してみたい。私なりに比較してみたいと思うんですが、まずフランスあたり、それからオランダあたりの絵を見ますと、ただそのまま自然を書いたまま、どこにでもあるような自然を書いたのが絵になるんですね。それで日本のやつを見ますと、なかなかそれが絵になってないような感じがいたします。これはどこにそこら辺のところが原因があるんであろうというふうに考えております。

そこで私は良く熊本へ行ったり、それから水俣へ行ったりいたします。この間、約お互いに40キロであったり50キロであったりするわけですが、その間、自動車で行きながら景色を見ていますけれども、田園は昔のままでなくて、全部ビニールで温室ができておると。ビニールハウスでございすね。これで田園の風景はほとんどないと言ってもいいんじゃないでしょうか。それから家を見ても、農家の家はかなり立派でございす。大きさは50坪とか60坪とか、もっと大きくなると100坪とかあるよう

な家で、瓦も立派ですし、その上には鯢が3匹やら5匹やら、威張りくさって引っ繰り返っているというような、そのような立派な家に聞いてみますと、数千万円の金をかけて造っていると。ところが同じ屋敷の中で、直ぐ倉庫やら車庫があるわけですが、それは全部大抵の場合鉄骨造りで、スレート葺でございます。景観としてみるならば、私はこれは全然絵にならないと、せっかくだからその鯢を辞めてですね、同じ程度のもので整備をしてみたらどうだろうと。もし車庫を造る金がなければ住まいの方を少しグレードを落として、同じような統一したような景観を考えてくれるならば良いなというふうに考えております。

これをもっと近づけてみますと八代市役所でございます。私達は毎日仕事をしているところでございますが、正面玄関から見るとまあまあ立派な建物。鉄筋コンクリートでサッシもアルミサッシでございまして、ガラスも1枚張りというようなことで、かなり立派な景観ではあるかと思います。ところが1歩後ろに入ってみます。裏から見てみますと、これは車庫やら倉庫が、先ほど申しましたように、これは農家と同じでございず。鉄骨造りでスレート葺き、ひどいのになるとトタン葺きでございます。そういうことでこれもまた絵に書こうと思って書く気が起こらない。写真を撮る気が起こらない。そういうふうなものでございます。

ところが道を挟んで白百合学園でございまして、あそこはカトリックでございまして、あそこのデザインはちょっと変わっております。あそこの建物は同じ鉄筋コンクリートですが、その鉄筋コンクリートの上には丸瓦と言いましょか、そういう瓦をはめておりまして、そしてギャラリーというのがついておりますね、そしてその隣を見てみますと車庫がありますね。その車庫も同じく鉄筋コンクリートでやはり同じ丸瓦を使っております。設計も同じ、材料も同じでございまして、全部統一されております。同じ場所にありながらそんなに違うんですね。これはやはり設計者が問題だろう。しかし設計者ばかりではございません。これを建築を依頼する人が問題であろうというふうに私は考えております。やはり物の考え方が違うんですね。価値感が違うと私は思うんですね。しかも建築は自分だけのものではない。やはり道路を通る人の目にも止まるわけでございまして、先ほど先生から、あれはガウディによる街並みの例、あれは揃ってますよというようなことをおっしゃいました。やはりああいうふうな景観に注意を払った、そしてみんなが行ってみたい、それから見て楽しい、気持ちいいというような場所に、なさなくちゃいかなというふうにも思います。例えば、外国の場合ですと、家の前に、

横にですか、2階あたりにベランダみたいな出窓みたいなのか建ってるんですね。あれは自分の家の中のためではないと言われております。道を通る人がそれを見て、そして「ああ楽しいな」、結局、家のシンボルと言いましょうか、家の紹介する場所になっておると。しかもみんなが見て楽しいなという花が咲き乱れておるわけですね。そういうふうに道路に向かっていているような感じがいたします。

その点、こちらの私達の家は、まず道路がありますと、玄関が狭い門になります。そしてブロック塀をしましたり、いろんなふうにして道から隔てるんですね。そして自分の中にはきれいな庭を持てますけれども、1つも見せない。結局、道路から逃げると言いましょうか、家はそれから引っ込んで内向的と言いましょうかね、そういうような感じがいたします。やはりそこらへんでこれは歴史的にも、それからいろんな人間性と言いましょうか、そういう何かが変わってる。価値感が違うんじゃないかというふうに考えております。

そういう面で、今からどんどん、八代市あたりも都市化をせにやなりません。ついては、やはり外国のそういう良い面と言いましょうか、先生の説明にありましたようなセットバックやら、それからいろんな広場やらを造りながら、楽しい町になるような、それから撮影の場所になるような、それから女性の方が良い着物を着て、そして楽しく歩けるような、そういう場所づくりを今からしていかななくてはならないんじゃないかというふうに思うわけでございます。アートポリスはまだ今、始まったばかりでございまして、その公共施設が主になっております。しかし、これは今言いましたように、公共施設だけのポイントだけをきれいにするんじゃなくて、民間の会社だとか個人の商店だとか、それから普通の民家にいたるまでこれに協賛をいたしまして、そういう楽しい施設を点から線に、線から面になるようにしなくてはならんということを思うわけでございます。このようなことを継続していくならば、次の世代には熊本県が景観では横浜には勝たないにいたしましても、アートポリスとして立派な都市になるものというふうに信じているものでございます。

町は生き物でもございます。どんどん変わっていくわけです。そこでまた、良い景観は都市の宝だというふうに私は思っております。その土地に生活している皆さんが協力して、そして努力を重ねることによりましてきれいな町、そして住み良い町を育てていこうというふうに思うわけでございます。どうか皆さん方の協力をよろしくお願いをいたしたいというふうに思います。以上でございます。

八束 はじめ ありがとうございます。それじゃ最後に桂さん、よろしくお願いします。

桂 英昭 桂です。今日はあまり準備をして来なくて、とにかく越沢先生がかなりのスライドがあるだろうということを想定しまして、それを見てから話の内容を考えようというふうに考えておりました。それで今さっきのスライドを見せていただいて、結局横浜というのは、一応日本の現状では町づくりにおいてはトップレベルにある。それは今のスライドで見まして、その範囲内ではデザインの背景があるということ、それとやはりある程度の数というか、いろんな企画をやったプロジェクトの数がある、それがある程度の面積を持っている。それをもってつまり横浜はアイデンティティがあるとか、まちづくりの再生とか創造という言葉が当てはまるんだろうと思います。

それに引き替えて、先ほど伊東先生のお話しの中に、熊本、八代もそうですけれども都市が昼寝をしているという表現がありました。これは何故かという、多分熊本県下で、実は越沢先生の話をついている途中から、じゃそういうことをやってるところは熊本にないのかというと、実はこれ、かなりあるんじゃないかと。ただその数が少なく、しかもその背景というか、今、やってる新しい動きの方に、背景に対する意識が少ないために、昼寝をしているような状態に受け取れると、そういうふうに言っても良いんじゃないかと思います。

例えば熊本県下の都市の中で、どういう都市がやってるかと言いますと、1つはこれはかなり成功している方ですが、昨年度景観賞を頂いた、熊本県の賞を頂いた三角という所。ここでは三角西港という非常にオランダ人が設計した石積みの街が残っておりまして、ここ近年、かなり整備が進みまして水路、それから港の蔵を改造してレセプションホール的なものにしたり、そういうのが進んでおるんですけども、例えばこの三角なんか部分的に取り上げると、今さっきの横浜の例と全然僕は変わらないんじゃないかと。それと三角で言うと、葉さんの海のピラミッドというアートポリスがあって、これも非常に、かなり好評を博しているわけなんですけれども、三角の町で考えると、この2つを結び、要するに過去と現在を結びつける手法というのをまだ使っていないために、三角においてはやはり昼寝をしているとか、まだ三角町の取るべきアイデンティティが決まってないような気がしてます。

それからいくつかちょっと例をあげてみますけれども、この前の日曜日に小国町というところでシンポジウムがあって、そこにも出席させて頂いたんですけども、そこには葉祥栄先生とかいろいろ来ておられたんですけども、その時にちょっと私が発言し

たのが、小国はある程度成功した街と言われてる。それは何故かという、もう木造建築に1つ絞って、例えば葉さんのかなり木造立体トラスという、かなり強烈な印象を持った建物を、これをたくさん建てたということですね。それで要するに町の木造に対する意識を変える軸というか、これは数が交通センター、体育館、バス停、それから林業センターと、こういうある程度の数を持っていたために、他の建物との関係が浮きだしになってきたということが言えると思います。

ただまあ小国町の町全体のまちづくりとしては今、そういうふうに点的に発展してきたために、これからどうなるかというのを考えていくレベルまで来ているんじゃないかというふうに思います。

それから山鹿という街があります。ここでは最近、坂東玉三郎の公演で有名になってきたんですけども、八千代座という古い劇場を再興してまちづくりをやろうということとでかなりここも盛り上がっております。実はここは八千代座だけでなく、かなり菊池川の川に面した近くにお酒屋さんがありまして、それから八千代座までかなり伝統的なまちなみが残っているんですけども、そこまで計画として至っていないと。新しいと言いますか、ちょっと前の建物でいくと、山鹿の山鹿プラザという再開発ビルがありました。ここは温泉とかそういうのを組み込んだ、下に店舗が入って上に住居が入っているという、かなり再開発ビルでは先駆的なものがあるんですけど、これも横浜の例でいきますと、かなり先駆的な建物だというふうに思うんですけども、いかんせんやこれはモダニズムというか、ちょっと前に建てられたものですから、コンクリートでおおわれている。横浜の例みたいに、例えばこれに何か伝統的な建物であったために敷地を揃えとか材料を揃える手法がなされておれば、横浜のレベルまでいけたような建物じゃないかと思います。

それからランダムに思いついたものをいきますと、人吉につきましては最近、街の中心部の再開発はなかなか進行しないんですけども、ある通りを整備しはじめまして、人吉は温泉が有名ですので、道路際に温泉の湧き出るような水の仕掛けを造り始めたということです。これもただ温泉だけの仕掛けはおもしろいんですけども、町の再開発と全然結びついてないために、先ほどの表現でいくと昼寝をしておる。

水俣で言いますと、水俣は公害という大きなバックグラウンドを背負っているために、まちづくりの方向としては川を整備するとか、お花を植えるとかという、そういう自然関係に今、力を入れてまちづくりを進めているという段階です。水俣の場合は、最近の

熊日等を読みますと、古い建物を残し始めたということですので、これからそういう意味で文化と自然と歴史と結びついたような街に、うまくいけばなっていくんじゃないかというふうに思っています。

それから熊本、熊本はこの今のいくつか例を挙げる時に考えようと思ったんですけれども、実は熊本というのは、僕はあまり最近の街づくりは好きではありません。と言うのは何故かという、今さっきの横浜のまた例を取りますと、デザインの背景というのがあまりないような気がしてなりません。それと造られてる町の、例えばストリートファニチャーとか、照明とかいろいろあるんですけれども、それも決して悪くはないと思うんですけれども、かなり既製品のデザインが多いんじゃないかと。もうちょっと熊本のことを考えて、バックグラウンドというか、デザインの背景のあるようなことを考えた方がいいんじゃないかというふうに思っています。

そういう意味でアートポリスの作品というのが、熊本で幾つか建ち始めているので、むしろあまり過去に引きずられる必要はなくて、熊本というのはやはり県土の中心ですので、そういう伝統だけに引きずられる必要はなくて、外に対して発信するような都市づくりをもう少し進めてもいいんじゃないかと思っております。

熊本でちょっとこれはアートポリスのシンポジウムですので、こういうものに触れて良いかどうか分からないんですけれども、最近、保田窪第一住宅団地とかで話題が出ておりますけれども、例えばあの例を取って、私流に個人的に解釈しますと、多分あの団地の設計者というのはデザインの1つのモチーフというか、本テキストと言いますかね、設計をする時の文脈というのを外だけに求めなくて、熊本は非常にそういう意味でデザインがなされていないというか、そういう意味で自分の設計する団地内にもう1つ都市を造ってやろうという仕掛けを仕組んだんじゃないかと。そのためにデザインがこれまでの団地と変わってきたんじゃないかと、そういうような解釈をしております。

何と言いますかね、熊本ぐらいだとそういう歴史だけでなく、新しい物に対して、それを取り込んでいくエネルギーがあるような街だと思います。

最後になりますけど、八代の例をいきます。八代というのは確かに昼寝をしております、ここ数年ですね、やっとどうにか動くんじゃないかという話がありました。1つはですね、鶴山課長からもちょっと、ひょっとすると説明があるかなと思ってたんですけれども、レインボープロジェクトという建設省の関係のプロジェクトがありまして、国鉄の球磨川駅跡地というのを核にしまして、そこを何らかの再開発をして、八代の中

心市街地を活性化すると、まあ点を活性化することであのもう1つの点を活性化し、それを結ぶという方法なんですけれども、それがちょっと調査段階なんですけれども始まってきた。それからもう1つ、今さっき水と緑のプロムナードとか、本町の緑地とか、そういうのが少しずつ整備されておる。これもまだバラバラの段階なんですけれども、それから城趾もありますし松濱軒もあるという、そういう要素はたくさんあると思います。従って八代というのは、これがバラバラに今の時点ではなっておりますので、どうか結びつけたら良い町になるんじゃないかというふうに思っております。

幸い博物館を伊東先生に設計していただいて、その横に県がシンボルロードという関係でかなり力を入れて道路整備をやって貰っております。それでその通りの一部の町の方とかは、非常に力を入れて貰いまして、博物館と連動したような、実は伊東先生にもかなりご協力を得ておるんですけれども、そういうまちづくりと言いますか、自分たちのお店の前を整備しようと、そういう計画をしております。だから私としてはそういう計画、アートポリスの計画がもう少し広い広がりを持つようになれば嬉しいなというふうに思っております。

大体思いつくままに、熊本の話をしたんですけれども、残念ながら今、私が三角、小国、山鹿、人吉、水俣、熊本、八代という、これぐらいのを全部集めると横浜に近い話ができたんじゃないかなと、そういうふうに思っております。以上です。

八束 はじめ ありがとうございました。ちょっと時間があまりないので、早速議論に入って行きたいんですけども、議論に入るために、ちょっと私なりに話を整理と言いますか、コアになる部分を取り出して考えてみようかなと思うんですが、特にこちらさんが非常に豊富な事例で紹介なさったいわゆるアーバンデザインですけれども、これは私なんかも最近、やはり日本の、横浜に限らず、私は東京ですから川崎であるとか東京であるとか、その辺の近郊の町が多いですけれども、町の、特に中心部を歩いていると、日本の都市は随分昔に比べると豊かになった、お金持ちになったなという感じは非常にするんですね。それは実際に、例えば歩道が広いとか、本当に良い材料を使って舗装をしているとかです。それからベンチとか街灯とかというものもお金がかかったものが取り付けられるようになった。そういう意味で、これはやっぱり日本の経済が大変好調である。世界的に見回しても、非常に成功した状態になっているということと、もちろん非常に密接な関わりがあると思うんです。

これは外国なんかに出てみますと、それが既に古いところでできあがってる町は別と

して、やっぱり経済が沈滞している所ってその辺までなかなか手が回らない。これは2、30年前に我々が知っていた日本の町というのは本当にそうだったわけで、ここ10年ぐらいのその辺の変貌というのは、非常にはっきりと見えて来ているなという気がします。

これはいうなれば、何と言うんでしょうか。例えて言うとな種の都市のマナーとか、エチケットみたいなものかなという気がするんですね。あるいはちょっと言い換えてみると、栄養が回ってきたというんですかね。横浜の写真、私も実は横浜に10何年住んでた人間ですけども、先ほどの写真なんか、私が引っ越してから整備されたのがほとんどですけど、見てると非常に良い栄養を蓄えて血色の良い町だという印象がすごくあるわけです。これはもちろん非常に重要なことなわけで、歩道は先ほど越沢さんが力説されてるように、狭いと広いというのはこれはもうデザイン、形であるとか色であるとか、そのデザイン以前にもうとにかく絶対的に広いものは良いというのは、これはどうも否定できない。どんなにデザイナーが頑張ってもやっぱり1メートルの歩道は1メートルでしかないという現状がありますから、やっぱりそういう基礎体力を蓄えていくというのは、これは是非共やっていかなければならない仕事だろうというふうに思います。

我々、アートポリスは大分違う入り方をしていますけれども、先ほど最初に申し上げたように、これを単なるモニュメントづくりというふうには思っておりませんので、是非共そういういわば基礎体力をつけていく、良い栄養をつけていく作業に結びつけたいというふうに思っておるわけですけども、なかなかその話が実は回ってこないんですね。これは何でかなということを考えて、次の問題に行き当たるんですが、どうもそれは我々が例えば伊東さんに博物館をお願いしたり、他のいろんな方に様々な事業お願いしていることとは多少違う部分の仕事であるというふうに思われているんじゃないかという気がするんですね。

例えば建築物を、先ほど伊東さんが見せになった博物館のように、いろんな作業を経てですね、大変ユニークな形にまとめていく。これは一般的にかなり公認される建築家、デザイナーの仕事であるというふうに見なされるようになっているわけです。ところがベンチであるとか、テーブルであるとかというのは、必ずしもそうでなくても良いと。そこそこお金をかけて、そこそこきれいにしておれば良いというふうな感じが、やはり一般的にまだあるのかなという感じがちょっとするんですね。これは越沢さんに対して多少挑戦的なものの言い方になっちゃうかもしれないけど、僕の考えなんかでは、

やっぱり栄養だけでは多少もの足りないところはなくはなく、つまり基礎体力は非常に大事だけれども、健康優良児は必ずしもおもしろい人間じゃないということがありまして、そういう部分にももっと、これは別に奇妙な形、見慣れない形をやっていくべきだという話ではなくて、もう少しいろんな積極的なアイデアないし法なりが持ち込まれることが必要じゃないだろうかという気がするんです。そうじゃないと、これは単純に経済力と一般ルールの問題になりかねないわけで、横浜にしても例えば先ほど伊東さんが写真をお見せになりましたけれども、「風の塔」のような、普通のいわゆるステレオタイプといいますか、定型では絶対できないようなアイデアが盛り込まれたものが出ています。それから風の塔の直ぐ側に、これは私の友人が関わった仕事ですけども、音の出る橋、欄干にいろんな仕掛けが、センサーがついておりまして、その中に音が出るような仕掛けが作られてる。これもやっぱり普通に考えていたら、橋なんてものは音が出るなんてことは誰も考えないわけですし、非常にユニークなアイデアなわけですね。

ですから基礎体力を付け加えていくと同時に、そういうもう1つ踏み込んだ手法なりアイデアなり、実は「都市にデザインを、田園にアイディアを」という標語は私が作った標語ですけども、この場合デザインとアイデアというのは同じ意味を実は込めておりまして、そういう新鮮なもの、今までにない独創的なアイデアを都心にも田園にも欲しいなというような意味を込めたんですが、そういうような形にアートポリスが、まちづくりの新しいやり方を提供していけるようになると、大変嬉しいという気持ちでいるわけです。

その場合、私も実は都市計画を最初に勉強して、段々都市計画に興味がなくなって建築に行った人間なんですけれども、その場合やっぱり都市計画の中で、今まで従来はですけれども、その手法なり、アイデアなりということをあまり評価する仕組みが、例えば建築のデザインと比べるとなかった。逆に建築の世界にずっといると、これまた他人の芝生はなんとやらの例えかもわからないですけども、逆にそういう評価軸しかないという、ある意味で今のところ、建築のデザインとそういうアーバンデザインが少しずつ背中を向け合っているのかなという印象があるわけですね。これは都市計画はかなり一般的な趣向の特性が強いし、従って一般的に認められるようなカテゴリーというとな難しいですけども、例えば周囲のカラーリングの話が先ほど横浜に出ておりました。

これはアートポリスに似た事業で、フランスのニームというところが推進しているところでもやっぱり町の建物の外壁のカラーコーディネートというのがありますけれ

ども、そういうふう比較的誰が見ても、これがベターであると、比較的賛同を得やすい手法に、どうしても都市計画って行きやすいわけです。

建築の場合で言うと、最近で言うと、ほとんどちょっとこれは私も困ったことだなと思っておりますけれども、歯止めがないぐらいにその辺が個人の、ちょっとそれこそアイディアの行き過ぎてしまっている。どうしてこ2つというのがずっと背中を向けながらやっていかなきゃいけないだろうというのが、今の日本のデザインの直面している1番大きな問題じゃないかと思うんですね。伊東さんは今回、差し当たって博物館、差し当たってという変な言い方ですが、博物館の仕事から始まって、当然、たまたま博物館が大変特殊な地域に建っていて、これは私の事前の予想よりはるかに幸いな地元の商店街の方や何かの盛り上がりを頂戴して、それから少し外にはみ出た仕事まで依頼をされてらっしゃるということなんですからけれども、今、私が言ったようなことに関して、何かご意見いただけませんか。

伊東 豊雄

私もまあ正直なところ、なかなか都市のデザインと、それから建築とがどういう関係にあるかということは、非常に難しい問題だと思ってきましたし、それからまた、これは特に70年代から建築家が、都市からどちらかという背を向けて自分の内側にこもってデザインをするという風潮が日本では非常に強かったと。その弊害が未だにどこかで尾を引いているような気がするんですが、今回具体的なことを申しますと、これは桂先生に引っ張り出されたというところもあるんですが、八代の中に通り町という博物館の前からつながっている通りがありまして、その商店会の何名かの方に呼び出されまして、俺達がいろいろ新しいまちづくりをしようとしているのに、何かこう一緒に乗ってくれという話をされました。そこのお肉屋さんの2階か何かにいきますと、ご自分達で作った町の模型が置いてありまして、そこに街灯を入れるとかですね、そこに植物を、どういう樹を植えるといったような、ご自分達のアイデアが盛り込まれておりまして、その方達とお話をしていた時に、僕が面白いな、これは僕が東京にいるんであまり大したことはできないけれども、来たついでぐらいに何かのことはアドバイスができるかもしれないと思ったのは、まず第1にとおり一遍に町をきれいにしようというような、まちなみを作っていこうというような発想とは全然違ったということがまず第1にあります。ということはどういうことかと言うと、もっとこの通りは昔は良かったけれども、今は人が来なくなっちゃって、もう商売にならない。これは何とかしなくてはという、必死の商店会の会長がもう必死になっておるわけです。

それでそれなら僕もデザインに関しては面白いことだったらやりましょうということですね、それで去年のクリスマスの時に、樹にクリスマスツリーをグラスファイバーを使ってこう実験する。それは今、フランクフルトのオペラハウスの天井でやってるものの一部を持って来て、そこで点けてみた。あるいは今、そこの通りの裏にある観音堂を移設するのをお手伝いしかかっているわけですけども、何かこう、先ほどの八束さんの言葉で言うと、マナーとかエチケット以前の問題として、街を何とかしなくちゃならないという切迫さ、それが非常にストレートに伝わったんですね。それでそのことが僕は何かデザインをしていく、建築を造っていく時に、1番、僕は大事なことだろうと思っております。

先ほど鶴山課長が逆の意味で、農家が鯨を掲げた家を造っておると。これは豊かさを人に見せびらかす。ある種の豊かさを誇示するという、このことが僕は農家に限らず、町をものすごく悪くしていると思うんですね。お金をかけて良いデザインだと思っているながら、要するに余裕の表現みたいな、そうじゃなくて、とにかく切実さ、ある種の謙虚さというかな。それは生活に対する謙虚さというものをどう住む方と造る側とが見つけて、発見していくかということに僕はかかっているような気がするんです。

ですから先ほどのまた課長の言葉で、ヨーロッパでは出窓がある。それは人に、通りを行く人のためにあると言われましたけれど、これが日本で同じことをやってみたらというと、どうも僕はちょっと嫌だなとか、照れ臭いなと思ってしまう。ということは何かそれが生活、自分の生活のスタイルになってない。何か借りてきた物のような気がするんですね。本当に何か今の時代に、もう1度、生活って一体何だろうということをや、やっぱり考える必要があるだろう。そういう意味で山本理顕さんが提起された問題というのは、いろんな新しい問題を含んでいて、これはやっぱり建築家が都市の問題に対して口を閉ざしてきたということの責任もあるだろうと思いますけれども、そこで私は何かそういうものをきっかけにして、新しい生活を発見するということが形に結びついていくというきっかけを作れたらと思うんですね。何かこう、形の奇抜さとかデザインの良さなんていうことを、我々はちっとも考えたことがないという気がします。あまり関係なかった。

八束 はじめ ちょっと時間がないんで、皆さんに発言をしていただくには、多少窮屈なところに、もう1つ、割り込みを入れるようで恐縮なんですけど、先ほど伊東さんがスライドの中で、八代のプロジェクトにランドスケープという形で、アメリカから今、来ておられるナン

シー・フィンリーさんにちょっとお手伝いを願ったということを言われてまして、アートポリスは何しろ国際プロジェクトにしたいというのが、これは知事の祈念でありまして、昨日お目にかかった時も「いやぁ、外人の参加が少ないんだ」ということを言われたんですけども、ちょっと一言発言して頂きたいと思うんです。と言うのはこれは唐突にお話をして頂くつもりではなくて、建築、アートポリス、私がさきほど申し上げたとおり、建築だけをやるのはどうも面白くない。いろんな環境の要素をやりたい。当然ランドスケープというのは重要な要素だと思うんですね。先ほど基本的な体力の部分というのはともすると定型化しちゃってというような話をしたんですけども、これは私個人の話になって恐縮ですが、今、大阪でやっております花の博覧会に関わって、去年大分いろんなことをやってきたんですけども、やはりそこで1つ、かなり痛切に感じたのは日本の造園、つまり緑を扱うセクションというのは、これは多分なまじ日本が造園の大変素晴らしい庭園技術、庭園デザインの伝統を持ってきたからかなと思うんですけども、非常にやっぱり発想がステロタイプなんですね。

これは僕が都市計画が嫌になっちゃった1つのきっかけなんだけど、緑を造るという
とみんなそれで文句を言わないという風潮があって、やっぱり緑だって面白い緑もあればつまらない緑もあるという話をどうして誰もしないんだろうかなということが、常々疑問だったんですね。私ちょっと、伊東さんとフィンリーさんがそのレベルでやられた仕事を詳しく存じ上げないんで、具体的な答えについてはわからないけど、多分僕が見てる限りではアメリカ、僕は別に海外のことはあまり日本より優れてるとかって、あまり持ち上げるのは好きじゃないんですけども、やっぱりアメリカのランドスケープというのは日本より、もうちょっとその辺は残念ながら上を行ってるかなという、公平な目で見てそういう気がします。

桂 英昭

何が大切かというか話して、やはり今さっき八束さんが言われた、要するに手法とアイデアという、そういうものが要するに一般性を持ち得るかどうかというかですね、要するにアートポリスをやって、それがまちづくりにどう浸透していくかというのは、かなり大きな問題だろうと思うんです。今さっき、伊東先生が通り町というところの話がされたんですけども、伊東先生がやはり提案されるのは、私が田舎に住んでるせいもあるかもわからないんですが、かなり過激なんですね。だけど、伊東先生はその通り町という所に行った時に、その自分のアイデアだけを説明されるんじゃなくて、その前に布石があるわけです。要するに今日、スライドでやって頂いて、今日、説明して頂いたようなことを町のレベルで既にやって頂いている。要するにデザインとは何かというような教育をやって貰って、アイデアを出すということ。

やはりアートポリスもですね、いろんな手法、アイディア、パンと出るだけじゃやはり一般性を持たないんじゃないかなという気がしております。だから何かもう1つ仕掛けとして、それを何と言いますか、双方に対話を持つというか、そういうことを我々地元に住んでいる、建築の関係者なりがもう少し頑張ってやっていかないといけないなと、そういうふうに思っております。

八束 はじめ 越沢さん、お願いします。

越沢 明

一言ちょっと考えてますのは、いろいろ明治時代とか大正とか、それからその前の時代でも、確かに今から見てなかなか良い建物とかというのは、一体どうしてそうなったのかなと考えてみますと2つ条件があると思うんです。1つはデザインが非常に明快だったと。明快であったという理由は2つあると思うんですね。当時は封建領主なり、誰それ、絶対権力を持った、あるいは富豪がですね、自分の好みで造ったか、あるいはまたその好みの人に任せた。これは明快なんです。もう1つはやはり富が集中したということであります。

ところが戦後の民主主義社会ではなかなかそうですね、確かに落っこちるような橋はできなかったと思うんですけども、確かに美しい橋というのはなかなかないとかですね、確かに車は滑らかに通ってるんですが、でも歩いて楽しい道じゃないと。つまり最低のミニマムを追求してた。これは民主主義社会ではしょうがないんですね。しかし今の役所のシステムとかですね、設計、施工、いろんな関係で言いますと、1つの強

烈な思想が貫くとか、これはあり得ないんです。じゃ、そこでどうなのかと申しますと、たまたまですね、先ほど言いましたように、今、日本が割とお金が少し回ってきたということと、今回、熊本の場合には知事のポリシーがあるというというのが1つあると思うんですね。

大体こういうものは、下から組織を上げてきますと、質とかデザインを勝負できるのはこれは役所では絶対通りません。これは止むを得ないんですね。そういうこれは組織のそういうもんだというもんだと思うんです。ですからやはりそういう民主主義社会の中で、しかもどうやるかということになると思うんですけれども、1つの方法としましてはね、特に熊本ではアートポリスをやっているということでは、既にかなり立ち上がってきましたから、やはり僕はデザイン室は明快にですね、それと設計者はこうやったらと、あるいは熊本県はこういう考えてやっただと。それからなるべく絶えず出す努力をしていくのは、僕は必要だろうと思います。

それからもう1つはですね、場合によってはたまたま今回、伊東さんが博物館を契機にいろいろ人も関わっているようだけれども、八代は伊東さんが全部やったとか、そういうことで、もう心中する覚悟ですね。今、日本が面白くないのは画一的で、最低限、つまりこの道路を通して危険でおこったとかいう、そういう危険性はないわけです。ところが如何に面白くないというのは、誰がどうなったかさっぱりわからない状況にありまして、ですからですね、やっぱりこういう時代になってきますと、もう人間の目は肥えてますから、むしろここはこういうつもりでやっただと。こいつのやっただのは非常に下品であるとか上品であるとか、それで良いと思うんです。あっさりこれは主観の問題になると思いますので。ただですね、場合によったらですね、今、一律多いのは良く商店街の再開発をしますと、大流行したからくり時計を入れてくれとかですね、舗装をカラーにしてくれとか、そういう部分がデザインと勘違いしてる人が非常に多いんですね。

それから大手のデパートを必ず造るとからくり時計を入れるとかですね、そういうのがありまして、そういうのは僕はデザインとは全く無縁だろうと。ですからそれも批判するとかですね、場合によってはこれは公共、駄目だと言い切る人間がどれだけ役所なり、あるいは設計事務所、あるいは建築屋に出て来るかと、そこに今後かかって来るのかなという気は持っております。

それから昨日今日と、私、熊本をちょっと回っていたんですが、やはりかなり良いものがありながら、町自身、村自身でそれを自分でアピールするところにまだ行っていない

と。それはさっき言ってる寝てるということもあるかもしれませんが、やはりですね、自分はこういうつもりだという、これは実際違ってるかもしれないんですね。それでいいんです。ただ、それを必ず出して行くこと自体がやはり理解なり誤解を招くということで、絶えず自己主張する努力がですね、いろんな形でも必要なということで、アートポリスのサッションをですね、もっと実はこういうつもりでこうなったというのは、是非まとめて頂きたいというような希望を持っております。

八束 はじめ ありがとうございます。それじゃ最後に鶴山さん、お願いします。

鶴山 崇 時間がないようでございますけれども、アートポリスが始まったばかりと。アートポリスのもとの目標が現在では公共施設が主であって、これによりまして、皆さんの雰囲気と言いますか、こういうのがどんどんどんどんグレードアップされる。10年前ならば、こういうことを言っても駄目であったのが、現在ではそれが当たり前になってきている。道路あたりでもグレードがぐっとアップしました。今から橋もただ渡るだけでなく、それが都市の何と言いますか、マークになるというような、そういうふうな時代になろうかと思います。

日本の経済も何ですか、建設予算を450兆だとか500兆だとかいうようなことも言っております。今からはそういう方面にもどんどん予算が回って来るだろう。役所でもそういうのを期待をいたしておりますし、それに合わせて民間でも是非、良いデザイン、それから良いまちづくりと言いますか、これは一朝一日でできないと思います。歴史が要ると思いますので、私達の代には間に合わなくとも、次の代には良くなるようにどんどん勉強し、お互いに頑張っていかなきゃいかんというふうに考えております。

はじめ ありがとうございます。最後に私の方から多少早すぎる、時期尚早ではあるんですが、PRさせていただきます。まだ完全に確定した話ではございませんので、抱負というふうな形で聞いて頂ければありがたいと思います。

アートポリスは92年までが1つのコースというふうに考えられておりまして、92年に「くまもとアートポリス'92」というイベントを持ちたいと思っております、その際には私共事務局では是非、点で始まったいろいろな事業を結びつけていくようなことを考えたいと。そのために先ほどから幾つか出てますけど、ペープメントであるとか、サインであるとかというような基礎体力の部分には是非参加をしてみたい。あるいはテンポラリーな祭ですから、その時、会期中だけ、何か町の景観をちょっと違えて見せるような実験的な試みなんかもできればしてみたいと思っております、その際にはレ

インボー計画が先ほどから名前が出てますけれども、建設省の連合計画に参加されてお
りまして、これは92年より先になってしまうようですけれども、そのプレビューを兼
ねまして、是非八代でも何かそういう町、建築単体ではなく、町に広がって行くような
ものをやってみたいというふうに考えております。

これから恐らく関係の方にはお願い、ご無理をお願いしたりすることがあるかと思
いますが、そのことをどうぞよろしくお願いしますという、ご挨拶を兼ねて私の方の締め
括りにさせていただきます。時間がもう多少過ぎまして、その後、博物館の見学がござい
ますので、あまりもう延長できないと思いますが、もしどうしてもご質問という方がいら
したら、お一人、お二人ならと思いますが、よろしいですか。それでは見学の方に切り
換えということで、パネルディスカッションを終わりにさせていただきます。

司 会

どうもありがとうございました。先生方には本当に貴重なご意見をご披露いただきまし
て、本当にありがとうございました。どうぞ、皆さんももう一度、講師の方々に大きな
拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

「くまもとアートポリス」事務局
熊本県土木部建築課内
〒862 熊本市水前寺6-18-1
電話096-381-8912